

515

30h

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5

始



現 代 語 譯

周 易

高 森 良 人 譯 著

支 那 哲 學 叢 書
刊 行 會

大 正

13. 9 25

內 交

175-30

筆者から

一、易は、四書やその他の書と違つて、獨特の形式を備へてゐて、或る部分は、餘りに簡結古奥で、なかなか簡單には取扱にくいところが少くない。それで、やや重複煩瑣のきらひがあるとは思ひながら、止むを得ず、大體に於て、先、原文を書き下して、然る後譯出することにした。

一、原文を譯するのにも、時と場合とに依つて、一定しないで、經文を端的に譯したところもあれば、或は又、象傳たんてんの内容を加味したところもあり、或は又、象傳と象傳とを以てしたところもある。その外、全體に亘つて、繫辭傳けいじてんや說卦傳せつくわてんを頭に入れて解釋して置いたが、その理由は、解題に一言したとほりである。

一、象傳と象傳とに就いては、兩者ともに譯を施したところもあるが、經文の解釋からして類推が出来るところは、原文の書き下しにとどめたところもある。然しながら、われ等は、それ等の全部を通覽した上で、經文を理會すべきものであることは、申すまでもないことであ

る。

一、經文は、全部譯して置いたけれども、十翼じゅうよくに就いては、繫辭傳の如く、都合上、或る部分を外のところで解釋して、全體としては、部分的に省略したところもあり、又、說卦傳や、序卦傳や、雜卦傳などは、それ等の内容を念頭に收めて、經文譯出の必要に應じて使用するのにとどめ、全體としては、譯しないこととした。

一、繫辭傳を經文の前に置いたのは、經文を理會する上に、是非とも、あらかじめ承知して置かなければならないところの易そのものの概念や、經文中の語義に關する諸事項があるからであつた。それで、筆者は、解題の各項を一讀した後、この繫辭傳上下を讀了した上で、經文を卒讀したならば、不完全なるこの一小冊子を通して、尙且、易哲學の内容の一般は、把握することが出來ようと考へてゐる次第である。

一、豫定の出版期日までは、是非とも脱稿したいと思つて、出來得るだけの努力を續けたけれども、餘すところ一部分になつて、豫期しないいろいろな支障のために、意を果し得なかつたことは偏に購讀者諸氏の寛容を仰ぐ次第である。

初校を終へて

周易の原稿も大震災に遭遇したけれども、幸にして厄難を免れたのは何よりであつた。支那哲學叢書も、新光社の罹災で、一時如何なるものかと私は心配してゐたが、今度、支那哲學叢書刊行會なるものに依つて完成を期することが出来るやうになつたのは、此上もないことである。拙稿を以て復興後の第一卷となすには餘りに貧弱であつて、讀者諸彦に對しても誠に相濟まぬ次第ではあるけれども、續刊の書冊に依つて有終の美をなすことを、せめてもの心遣りとする次第である。

大正十三年八月廿日

黒髮の寓居に於て

筆者再識す

解題

一、易は何の書か

史記の作者司馬遷は、その孔子世家に於て、孔子が、晩年になつて、あまりに喜んで易を反復熟讀したことに就いて「韋編三たび絶つ」と書いてゐる。われ等は、その崇高圓滿なる人格と深遠不測なる學識とに對して、没後二千四百年の今もなほ尊崇措く能はざるところの至聖孔子が、何が故にかくまでも熱心なる易の愛讀者であつたかといふ事に就いて、三たび思を致さなければならぬと思ふ。即、孔子が、多年の思索と體驗とに依つて、人生のあらゆる道徳的生活をば、仁の一字に包容歸納せしめて、造次にも、顛沛にも、それが主張宣傳に全力を傾注したところの仁の根本觀念となしたものは、いふまでもなく敬天の思想であつたのである。しかもその敬天の思想たるや、當時に於ける他のあらゆる迷信的俗信仰を斥けて、人類の創造者であり支配者であるところの絶對者に對する尊信に外ならないのである。要するに、孔子は、精神の方面に於ても、實際的方面に於ても、合理的であるといふことを、無上に尊重したのであ

つた。然しながら、この前提は、孔子の易の好愛に依つて、裏ぎられるのではなからうか。もし然らずして、却つて孔子の合理的生活を立證するものであつたとするならば、果してその何れの點であつたのだらうか。われ等は、先、この問題から解決して見ようと思ふ。

元來、易そのものの目的とするところは、占筮であつたのである。不完全なる人智を以てしては、到底判断豫測し得られない場合、超自然的なる絶對者の力に憑依して、事の善惡去就を決せんとするにあるのである。けれども、その絶對者は、遂に、超自然的なるものである限り、人は、何等かの方法手段に依つて、その意思を測知しなければならない。この必要上あらはれたものが、すなはち、占筮である。されば、占者は、私念を掃蕩して、専心一意、神性を祈願、することに依つて、單なる人としての自己をば、絶對者の意思の傳達者にまで、淨化するを要する。さりながら、如何に占者といへども、人は遂に人たる以上、よしんば絶對者の意思を假定しても、その傳達には誤謬を免れないので、大事を占ふ場合に於ては、かならず三人に占はしめて、その結果に依つて去就を定めたわけである。要するに占筮も龜卜と同様に、絶對的の價值あるものか否かの問題は、一先づ措くとしても、古來、龜卜占筮に對して、多數決となした

といふことは事實であつて、この事實からして考へると、少くとも、絶對的合理性を有するものではないと考へられてゐたことだけは確である。して見れば、孔子は、單に吉凶判断の書としてのみ易の愛讀者でなかつたことは明かであらう。然らば、孔子は、何が故に易を好愛したのであらうか。この問題を解決するには、先、孔子の人格的傾向を知れば足りる。孔子の門人は、三千人の多きに達し、就中、身六藝に通ずる者七十餘人と傳へられて居る。かくて、三千人の門弟子の尊信崇拜の焦點となつたところの孔子の日常生活が、その一舉手一投足に於てもことごとく、完全なる人格の表現であつた事は推測されよう。而して、完全なる人格者の好愛するところは、あくまでも理想的であり、道徳的でなければならぬ。ここに於てか、孔子の易愛讀の理由が、單なる判断の書としての易ではなくして、簡結古奥なる易の經文の中に、人生にありて、倫理道徳的中庸の生活を營む上に於て、必要缺くべからざるところの原理の把握すべきものがあつたからであるといふことは、疑ふ餘地がないと思ふ。われらが、自然と人生との複雑混淆せる諸相に就いて、ややもすると、あだたも偶然であるかの如く解釋せるものも、少しく冥想靜思をなせば、かならずや、それ等雜多の諸現象は、必然的の結果であるといふこ

とに想到するであらう。しかもなほ、偶然のものであるかの如く考へられてゐることも、科學の進歩につれて漸次解決されて行くであらう。切言すれば、われ等が營む人生の行路に、現實に存在するところの人倫關係——これを一般的にいふならば、男女兩性間の關係、これを特殊的にいふならば、それぞれ君臣、父子、夫婦、兄弟、朋友等の間の關係の如き——に於て、誰もが憑依すべき、過不及なき、穩健中庸なる道德的原理を把握し得らるべしとの豫想があればこそ、われ等は、あらゆる經典に對して、敬虔の念を有するわけである。この豫想、この要求は、聖凡を通じて共通である。かくてわれ等は、孔子讀易の理由が、那邊にあつたかを推測することが出来る所以である。

以上述べたところに依つて、われ等は、易を解説するに當つて、占筮の書としての易と、倫理もしくは形而上學的方面的の書としての易との二様に分けて見たいと思ふのである。尤、その前に一言して置きたい事があるが、それは、思想發達の順序からすれば極めて原始的な而も神秘的な判断の方法としての易から、それに倫理道德的な説明が附加へられたところの易の經文、すなはち、卦辭や爻辭かうじとなり、更に、その注釋である十翼となるまでの間には、思想上、

もしくは内容上、可なり顯著な變遷の跡があるやうであるけれども、それは、一般人智の開發に伴うて、漸次思想が分化されて來たのと、その表現の方法なり、形式なりが、巧妙になつて來たためとが、與つて力あるものであつて、大體に於ては、後者を通して前者を迎へて解釋すべき點が多いのであつて、従つて、經文の解説にも、十翼の思想を以て織りなしたわけである。

二、易・周易・易經

單に易といつたり、周易といつたり、或又、易經といつたりするのは如何なる理由に依つてであらうか。易經といふのは、易といふ書冊が、他の書・詩・禮・春秋と併せて、五經と稱し、更に樂を加へて、六經と稱するやうに、何れも皆、經典であるといふ意味であるとしても、易と單稱しないで、周易と、わざわざ周の字を加へるからには、相當の理由がなければならぬ。それに就いて、問題なのは、易に三つの種類があつたといふことである。即、周禮の春官の大卜の職の所に、「三易の法を掌る。一に曰く、連山。二に曰く、歸藏。三に曰く、周易云々」とあるが、この三易に關する解釋は、色々あつて、定説とまでは行かないけれども、略々通説と

なつてゐるのは、唐の孔穎達くわうえいたつの説で第一の連山といふのは、連山氏すなはち、神農氏の易で、夏の時代に用ゐられたものであり、第二の歸藏といふのは、歸藏氏すなはち、黄帝の易で、殷の時代に行はれたものであり、第三の周易は、申すまでもなく、周代に於ける易のことであるのである。而して、この三易なるものは、勿論多少の相違はあつたにしても、何れも皆、八卦を基本とし、その中二卦つづを組合せて六十四卦となしたものでらしい。尤、現存してゐるのは周易だけで、外の二つに就いては、その詳細を知ることには出来ないわけである。ところで、右の解釋とよほど懸絶してゐるのは、漢の鄭玄せうげんの説で、連山といふのは、山が雲を出して、連連として絶えない有様に象つたもので、歸藏といふのは、森羅萬象をその中に歸藏してゐるといふ意味によつたものであり、周易といふのは、易道といふものは、時空間を超絶して、あらゆる時、あらゆる處に周普するものであるといふ意味を表はしたものとあると主張することである。併、これも、全く、彼の獨斷的の臆見であつて、信憑すべき限りのものではないと、孔穎達も駁してゐるとほり、實際、鄭玄のいふが如く、三易の名稱なるものは、それぞれ、易そのものの有する内容に依つて命名されたものであるといふ説を、假りに是認するとしても、連山

と歸藏とは、やや肯定されようけれども、第三の周易に至つては、彼が他の場合に於て、「夏には連山といひ、殷には歸藏といひ、周には周易といふ。」云々と説くのと相一致しないことを、彼は何と辯解するのだらうか。即、一面には、周普といひながら、他の一面には、周といふ國名を冠らせてゐるではないか。少くとも、この一點だけに就いて考へて見ても、自家撞着の説としなければなるまいと思ふのである。要するに、ここにいふところの易は、現存せる周易のことであつて、しかも、それは、周代に於て行はれたものであるとして論を進めることとする。但、周易といへども、現存の體系を具へるまでには、可なりな發展の段階順序があるであらうし、従つて、また、その間相應の年月を要したに相違ない。ここに於てか、易の作者に關して諸説紛紛たるわけである。この問題は第三項の十翼の所で取扱ふとして、この項に於ては、易の名義を簡単に説明して置くつもりである。

易の書名並に易そのものの根本觀念を定むるには、通常、易といふ字の字源的研究に依ることになつてゐるやうである。即、漢の許慎の作である説文に、「易は蜥易、蜥、守宮にして、象形なり。周易の義疑ふらくは此に出づべし。蜥易は、日に十二時變色す。故に易といふ云々」

とあることに易の書名は因んだものであるとする説が通説となつて、朱子の如きも「交易變易の義あり。故にこれを易といふ。」といつてゐる。鄭玄が、易は一名にして三義を含むといつて易簡・變易・不易の三つを擧げてはゐるけれども、要するに、變易を以て易の根本觀念となすことに於ては、一致してゐるのである。かの漢の魏伯陽の著と稱せられてゐる參同契に易の字を分析して、易の字は本來、日の下に月を書くものであるとして、陰陽柔剛相依屬するの意に解するのには、餘りに穿ち過ぎた議論である。

三、易の作者及十翼

易の作者の考究には、文献としての易の内容の解説から出發する必要がある。何となれば、春秋三傳中の一つである左氏傳に、春秋の經文と左氏の傳文とがあるやうに、易には、むしろそれ以上に、易それ自身の根本的のシンボルであるところの卦は勿論のこと、象すなはち卦の説明の辭や、象すなはち爻の説明の辭、換言すれば、六十四卦三百八十四爻の内容の説明としての經文の外に、所謂十翼なるものを含めていふのである。而して、十翼といふのは、象傳上下・象傳上下・繫辭傳上下・文言傳・說卦傳・序卦傳・雜卦傳である。而して、象・象・繫辭が各々上

下に分れてゐるのは、經に上下の區別があるからである。具體的にいふならば、上象とは、上經の象の解釋であり、下象とは、下經の象の解釋であり、上象とは、上經の象の解釋であり、下象とは、下經の象の解釋であり、繫辭上下は易そのものの内容に關する一般的説明であり、文言とは、乾の卦と坤の卦との字句の解義であり、卦とは、八卦の一般的説明であり、序卦とは、六十四卦の順序の説明であり、雜卦とは、六十四卦の中、二卦相對をなすもののみに關する、特殊的の説明であるのである。

右に述べたところに依つて、大體察せらるゝ通り、易は、一時代に、同一の人の手に依つて作られたものではないのであつて、その作者や時代に關する色々の見解も要するに推定に過ぎないのである。前述の繫辭傳には、「古者包犧氏の天下に王たるや、仰いで象を天に觀、俯しては法を地に觀、鳥獸の文と地の宜とを觀、近くは諸を身に取り、遠くは諸を物に取る。是に於て、始めて八卦を作りて神明の徳に通ず云々」といひ、淮南子にも「伏羲、之が六十四變をなす」といつてゐる。この外、重卦に就いては、或は神農であるといひ、或は夏の禹王であるといひ、又或は周の文王であるといふやうに、異説紛紛たるの有様であるが、何れも皆、學

術的研究の結果ではなくして、單に一種の臆説に過ぎないのである。さりながら、易なるものが、支那民族の間に、太古から存在してゐたことだけは肯はれるのである。

次に、十翼の作者に關しては、司馬遷が、孔子世家に於て、孔子の作と斷じてからこの方、ほとんど定説となり、漢書の藝文志にも、「易は三聖を更へ、三古を歴て成る云々」と稱して上古に於て、伏羲卦を畫し、中古に於て、文王周公卦及爻の辭を繋げ、近古に至りて、孔子十翼を作ると明記してゐるけれども、降つて宋代に至り、經典の批判的研究の結果は、かの歐陽修の如き、まづ、十翼に關する疑問を懐き、その後の學者も、その研究を續けてゐたので、今では、大體に於て、孔子の作ではないといふことになつてゐる。けれども、それも、象と象とが孔子以前にすでに存在してを、十翼は孔子以後のものであるといふ點までであつて、それより以上の説明は出來ないやうである。要するに、この問題は、現存せる文献だけによる時は永遠に解けざる謎として殘されて行くであらうと考へられる。

端的にいふならば、易の經文と十翼とは、思想的には、當然、何等かの相違あるを免れない次第であるのみならず、同じ十翼の中にも、象傳繫辭傳文言傳とあるが如く、それぞれの目的

とするところが異なるだけ、その間に思想上の異同も當然なければならぬわけではあるけれども、元來、十翼そのものの根本目的が、易の解釋にある限り、同一統系の思想たるはいふまでもないのみならず、十翼を通して解釋せざる以上、易それ自身の解釋は到底不可能であるとするならば、さうして又、經文といひ、十翼といひ、何れもその製作年代が不明であるならば、われ等は、嚴密なる考證的研究の結果を得るまで、さしあたりの便宜上、その各の間の矛盾撞着等に留意しないで、全然締合的の見地よりして、易の思想を抽出して見たいと考へる次第である。

四、卦と爻

われ等は、前項に於て、幾度か卦と爻の字を使つた。然らば、卦と爻とは如何なるものであるか。又、八卦といひ六十四卦といふのは、如何なる性質のものであるか、一通り解釋して置かなければならなくなつた。卦の字義は掛で、宇宙萬物の形象をかけて、人に示すといふことを意味し、爻の字義は效で、宇宙萬物の形象にならふといふ意味であると説かれてゐる。而して爻には陰と陽との兩様があるけれども、所謂卦なるものの構成組織の基礎をなすのは、申すま

でもないが、その爻によつて組立てられたところの卦なるものが、易の根本をなすことは、前にも一言して置いた通りである。従つて、易を解くには、先、卦を知らなければならぬし、その卦を知るには、又、爻を解してゐなければならぬ。この意味に於て、卦及爻の釋解は、互に相依屬せざるを得ないのである。

今一つの例をとつて見る。上圖に於て、われ等は、これを卦といふ。又、これを小成の卦ともいふ。換言すれば、三段よりなるものをさして、小成の卦といふわけである。然るに、右の卦を構成するものの中には、一のシンボルと、一のシンボルとがあつて、それ等のシンボルをば、それぞれ爻と稱するのである。又、一線の中央が中斷されたところの前者を、陰爻と名づけ、一線の中央が中斷されざる後者をば、陽爻といふのである。この意味に於て、小成の卦とは、陰爻のみか、陽爻のみか、或又、陰陽兩爻を取混せてか、兎も角も三爻より成るものといふわけである。而して、小成の卦といふのは、申すまでもなく、大成の卦に對していふ辭であるが、大成の卦とは、重卦の義で小成の卦を二つ重ねたもので、六爻より成るものである。故に、陰陽兩爻を組合せて生じ得る小成の卦の數は八つで、而してその八つに限られる。乾

☰・☷・☱・☲・☳・☴・☵・☶

として、二卦づつ組合せて生じ得る大成の卦の數は六十四であるが、その名目その他に就いては、第二篇の本論に於て述べるつもりである。

ところで今、☰(乾)と☷(坤)との二つの小成の卦を以て、大成の卦を作つて見ると、☰☷の場合と、☱☲の場合との二つの場合があるであらう。然るに、前述の八卦は、これを自然現象にあてはめると、乾は天・兌は澤・離は火・震は雷・巽は風・坎は水・艮は山・坤は地に配當せられる。故に、☱☲はこれを坤下乾上・天地否の卦と稱し、☰☷はこれを乾下坤上・地天泰の卦と稱する。而して、この一例を以て察せらるる通り、何れも下より讀んで行くことである。これは、爻の讀方も同様であるが、これ、説卦傳に易は逆數であると稱せらるる所以である。

次は、大成の卦に就いて、爻の讀方を考へて見ようと思ふが、その前に一言して置く必要があるのは、陽爻を九と呼び、陰爻を六と呼ぶことである。而して九を以て陽を代表せしめ、六を以て陰を代表せしむる理由は、筮竹を數へる場合、(第七項参照)かならず六か七か八か九か

の何れかの結果を得ることになるのであるが、その中、六と八とは偶数なるが故に陰であり、七と九とは奇数なるが故に陽である。然るに、陰は消極的下降的ならば、六と八の中で六をとり、陽は積極的上昇的ならば、七と九の中で九をとつたわけである。かくて、大成の卦の爻を読むには、前述の逆数の定理に従つて、最下を初として、漸次上に向つて、二・三・四・五・上と數へて行く。これに六もしくは九を配して、陰陽を區別すれば、陰の場合は、初六・六二・六三・六四・六五・上六といひ、陽の場合は、初九・九二・九三・九四・九五・上九といふ。この事を明瞭にするために離下坎上・水火既濟の卦を例にとる。



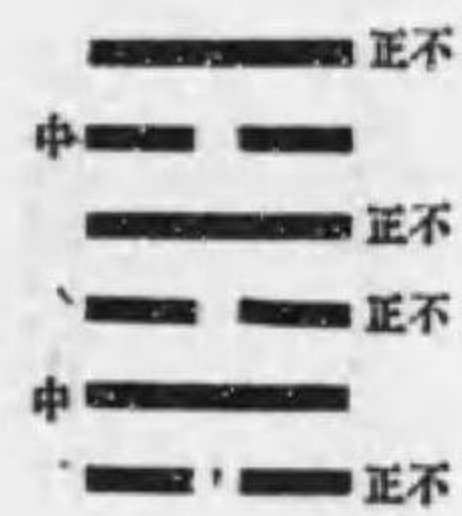
右に於て示したとほり、坎はこれを上體とも外卦ともいひ、離は下體とも内卦ともいふ。

五、中正・應比等に就いて

易の本文を読んで行く中には、「位を得る」とか、「位を得てゐない」とか、「正である」とか、「正を得る」とか、「正を得てゐない」とか、「不正」とか、「真正」とか、「中を得る」とか、「中を得てゐない」とか、或又、中正兩者を併せて、「中正」とか、「中且正」とか、「中正を得てゐない」とか、「不中不正」とかいふやうな語句がしきりに出て來るので、まづ、それ等のことを説明するならば、かうである。

大成の卦を構成するところの六爻には、それぞれの位といふものが定まつてゐる。すなはち、陽には陽の居るべき位といふものがあり、陰には陰の居るべき位といふものがあるのである。それを一層具體的にいふならば、陽は奇数であるところの初・三・五に居るべきで、それを陽位といひ、それに對して、陰は偶数であるところの二・四・上に居るべきで、それを陰位といふのである。従つて、陽もしくは陰爻でありながら、陰位に居るか、或又、陰爻でありながら陽位に居るならば、それは、位を得てゐないことになるし、正を得てゐないことになるし、不正であるわけである。然るに又、二の位は、内卦もしくは下體の中であり、五の位は、外卦も

しくは上體の中である。この意味に於て、初爻とか、三爻とか、四爻とか、六爻とかいふものは中を得てゐないわけであり、不中なわけである。而して、ある爻の説明をする場合に於てはその爻が正であるか、不正であるか、中を得てゐるか、不中であるかは、吉凶悔吝（繫辭上參照）が斷定される一つの理由となるものである。故に、陽爻にして五爻に位するものと、陰爻にして二爻に位するものとは、ともに中正を得るものであるわけである。今このことを圖示して見よう。

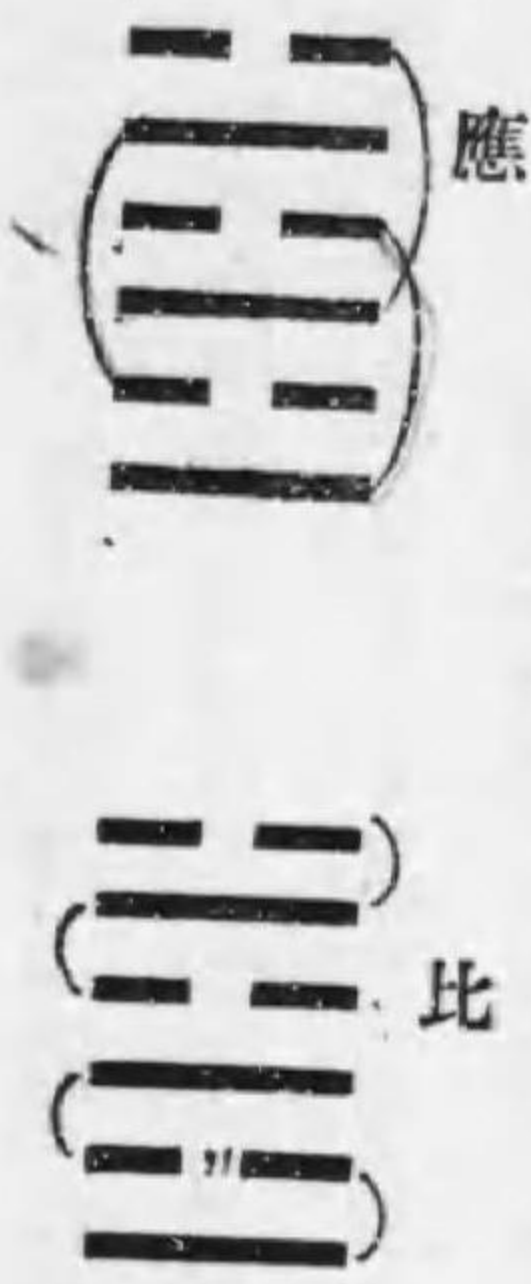


右圖に依つて見ても分るやうに、中といふものは、陽にして陰位に居るか、もしくは、陰にして陽位に居るもの、換言すれば、正を得ずして中なるものをいふのである。

然るに又、本文には、「相應する」とか、「これは何々の應爻である」とか、「相應すべきものを有しない」とか、「何々をその正應として有する」とかいふやうな文句が、しばしば出て来る

のであるが、それらは、次のやうな意味である。すなはち、初は四と應じ、二は五と應じ、三は上と應するのであるが、それは、他の方面から考察するならば、初すなはち下體の第一爻は四すなはち上體の第一爻に應することであつて、二と五・三と上とも、みな、それぞれ、上下二體の同一の位に相當するものなるが故に、相呼應するわけである。而して、正位に居るもの同志が相應する時。（例へば初九と六四との如く）は、それを正應といふのである。而も、應爻を有するか否かは、次にのべるところの「比」といふことと同様に、吉凶悔吝の判斷の一つの條件なるのは、申すまでもないことである。

ところで、今「比」といつたが、それは、相隣するところの二爻が、互に相親しき關係を結ぶといふことである。すなはち、例へば、初九と六二との如く、初九の陽と六二の陰とは、陰陽相牽引交感するといふ易の根本原理からして、勿論親比しあふべき性質のものなのである。この事を圖を以て示して見れば、左の如くである。



次に又、「何々を承ける」とか、「何々に乗ずる」とかいふこともあるが、前者は、下にある陰爻が、上にある陽爻を受けることであるが、この場合、陽爻を中心として考へれば、陽爻は陰爻に「據つてゐる」ことにもなる。而して後者は前者の逆で、陰爻が陽爻の上に乗つてゐるときのことをいふ。尙又、「何々の卦主である」とか、「何々の卦に主なり」とかいふこともあるが、それには、成卦の主と、主卦の主との二つがある。前者は、成卦の主すなはち中心主要の地位をしむるところのある爻をいひ、後者は何れの方面からしても完全なる境遇地位にするところのある爻をさしていふのである。故に六十四卦のおの卦主があるわけであるが、而も成卦の主と主卦の主とは、同一の場合もあれば、獨立して存在する場合もあるのである。例へば、乾の卦九五や、坤の卦の六二などは、両者が同一の場合で、小畜の卦に於て、六四を成卦の主とし、九五を主卦の主とするが如きは、その後の場合である、

なほ、この項で一言して置きたいことは、卦と階級との關係に就いてである。すなはち、初爻は庶人にあたり、二爻は士にあたり、三爻は大夫にあたり、四爻は公卿(或は大員)にあたり、五爻は天子にあたり、上爻は無位のものにあたる。

六、易の根本原理

易の根本原理を、もしも前述の如く、經文よりも後代に出來たところの、従つて、易に對して形而上學的考察を施したところの繫辭傳に依つて解釋するならば、萬物の根源を、單に、陰陽に置くことに満足しないで、その上に、更に大極たいきょくといふ觀念を置いて、それが陰陽の兩儀を生じ、春夏秋冬の四象となり、更に八卦となり、遂に萬物を生ずるといふ工合に説くけれども、經文そのものを端的に解釋するならば、勿論陰陽の二元論でなければならぬ。而して、その陽なるものが、あくまでも剛健な活動的積極的なものであるのに反して、陰は、極めて柔順な、靜止的な、消極的なものであるのである。而して、それは、宇宙現象たると、人倫關係に於ける諸相たるとを問はず、或又、時空間的たるとに論なく、それを適用すべき性質のものである。例へば、天に對する地、日に對する月、明に對する暗の如き、乃至、父に對する子、君に對する臣の如き、その外、場所の高下、人事に於ける貴賤尊卑の如き、皆、陰陽を以て説明されてゐる。この意味に於て、元來積極的な陽を象徴するところの陽爻が、本來消極的な陰の位に居るか、もしくは、その反對な場合は、ともに背理であり、不合理であるわけである。

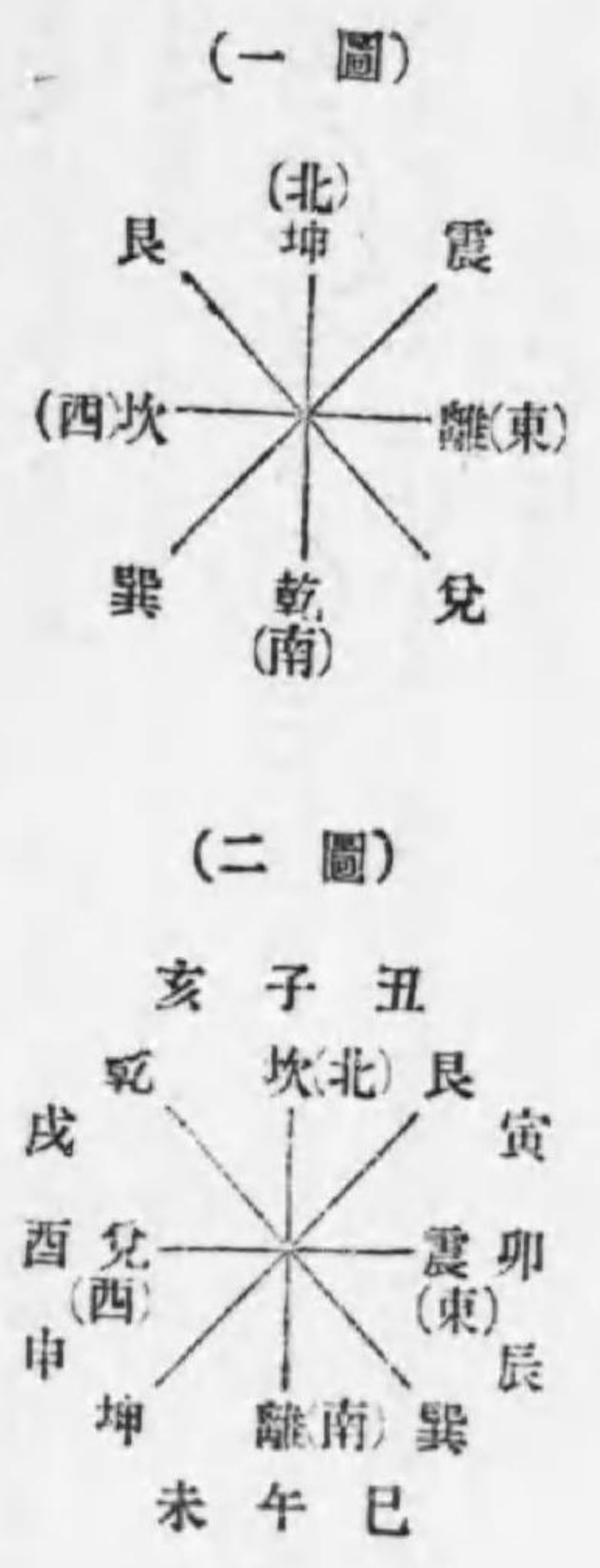
而して又、變易といふ易の根本觀念からしても分るやうに、窮まれば變じ、變すれば通ずといふ、すなはち窮通といふことを以て、その本質とする意味に於て、陽の極は陰となり、陰の極は更に陽となるし、又、上にある陽は下降し、下にある陰は上昇して、ここに陰陽二氣の交感が行はれて、その結果、萬物を生々することとなるのである。故に、この窮通といふことは人事に關しても同様で、吉はやがて凶となり、凶はまた吉となるべき必然性を有することとなるのである。

七、卦の家族的意義と方位等

易を読む上に就いては、八卦と家族關係並に方位といふことをあらかじめ承知して置く必要がある。前述の通り、陽は男性であり、陰は女性であることからして、乾を以て父となし、坤を以て母となすことは、直に理會されよう。然るに、その他の六卦を、それぞれ男の子と女の子とに配するのみならず、それに、更に長幼の關係をつけるといふことに就いては、これを一通り説明を要するのである。すなはち、六卦に男女を配するには、おのおの三爻から成立するところの卦に於て、その三爻の中、例へば、震の卦の如く、(☳)陽が一つで、陰が二つの場合、

陰陽の絶對價值は、當然陽が大でなればならぬ。故に、それは男性を意味する。而して、陽爻は第一位にあることからすれば、長男でなければならぬ。このことは、陰陽二氣交感の際、最初に生じて來たところの男性であるといふ方面からでも説明される。この根本原理から觀察すれば、巽(☴)は長女にあたり、坎(☵)は中男にあたり、離(☲)は中女にあたり、艮(☶)は少男にあたり、兌(☱)は少女にあたるわけである。

次に、方位に關しては、先天圖もしくは伏羲八卦の圖と稱するもの(圖一)と、後天圖もしくは文王八卦の圖と稱するもの(圖二)との二つがある。



尙一言すべきことは、八卦には、それぞれ、徳と稱して、一定の意義を持たしめてゐること、

である。すなはち、説卦傳に、「乾は健なり。坤は順なり。震は動なり。巽は人なり。坎は陷なり。離は麗なり。艮は止なり。兌は説なり。」といつてあるが、それは、大體、次の如き意味に於てである。

第一、乾の卦は、運行してしばらくも休止することなき天體の象徴であつて、所謂天行健なる所以であり、坤の卦は、天の氣を受けて物を作成するところの地の象徴であつて、柔順といふ意味であり、震は、二氣の交感に依つて陽氣がはじめて發生した結果、雷鳴が起つて、萬物を震動發生するところの雷の象徴であつて、それから動といふ觀念が抽象されたものでもあり、又、はじめて陽氣發生して、これより活動せんとするといふ意味でもあり、巽は、あまねく吹きめぐつて入らざるところなしといふ風の象徴であつて、それからも入の意義が生ずるし、又一陰が二陽の間に侵入してゐることでもあり、坎は、常に低い所にあるところの水の象徴なので、陷でもあり、險難でもあり、又、一陽が二陰の中に陥没してゐるといふ意味でもある。又、かならず物に燃えつくところの火は、離の象徴であるので、そのことからしても麗くといふ意味はおこるし、又、一陰が二陽の間にあつて、その何れにも著いてゐるかたちからしても

つくといふ意味は生ずる。而して艮の象徴は山で、その山は、常に靜止してゐるといふことか
らして、止といふ意味がおこるし、一陽が上にあつて、二陰の増長を阻止してゐるかたちから
も止の意味はおこる。而して兌の象徴は澤であるがその澤に常にうるほさるるところの萬物は
悦ぶものであるからして、兌は説なりといふことがおこるし、兌の卦象が、人が口を開いて笑
つてゐるやうであるからでもある。

八、占筮に就いて

前にも一言して置いたとほり易といふものは、本來、占筮の書であつて、それに次第に倫理的意義なり、形而上學的意義なりを多分に加味するやうになつたものであるが、それ等が、現代生活に如何なる意義を有するか否かを闡明することは、この書の目的とするところではない。率直にいふならば、筆者は、易の經文ならびにその解註たるところの傳文をば、なるべく如實に敘述することに依つて、讀者とともに易の有する根本原理を把握して、以て何等かの暗示を得たいと思つてゐる次第である。この見地からすれば、新城博士の意見の如く、占筮といふことに科學的價値が有らうと無からうと、それは、少くともこの場合に於ては、主要の問題とは

ならぬ。(なほ、この事に關しては、筆者は易の根本原理に對して、科學的説明をしたところの一冊の英書を手に入れたので、それを目下翻譯してゐるから、他日折を得て紹介したいと思つてゐる。)けれども、易といふことは、占筮と全然孤立して解釋すべきものでもないので、ここでは、便宜上、繫辭傳の第九章を基礎として、極めて簡単に説明して置くにとどめて、他の多くの占筮法や用具などに就いては、一言も觸れないつもりである。

大衍たいえんの數五十。其の用ゐるものは四十有九なり。分けて二と爲し以て兩かたに象かたどる。一を掛けて以て三に象かたどる。之を揲かざふるに四を以てし以て四時に象かたどる。奇きを扚かに歸して以て閏じゆんに象かたどる。五歳にして再閏なり。故に再扚して而る後に掛く。(中略)

是の故に四營して易を成し十有八變して卦を成し八卦にして小成す。(下略) (繫辭傳)
右の章の字義を解釋しながら、多少數衍して見るならば、繫辭傳を基礎とする占筮法は、大體次のやうになる。

大衍の數、すなはち天地の概數として、それを更に數衍して、善よき(後世には筮竹を使用する)を數へて卦を求むるために用ゐるのは五十、換言すれば五十策(善を數へるには一策二策とい

ふ)であるが、その中一策だけは太極に象つてこれを別にするからして、實際に運用するところのものは、四十九策となるわけである。この四十九策を任意に二分して、それを陰陽兩儀に象かたどる。(以上一營)かくて、二分されたものの中、左手の方を天とし、右手の方を地とし、而して右手の方を一先づ机上に置き、その中から一策をとつて、それを左手の小指と無名指との間に挟んで、(このことを扚に掛くるといふ)天地人三才に象かたどる。(以上二營)次に、この左手の方を四策づつ一緒にして數へて行くのは、四時に象かたどるものである。(以上三營の前半)かやうにして數へた残りは、それを奇きといふのであるが、その數は當然一か二か三かもしくは四でなければならぬ。(零とはなさぬことになつてゐる)そこで、この奇を扚の方に歸して、すなはち三才中の人に象かたどつた一策と合せて閏に象かたどる。(以上四營の前半)然るに、この時代の曆法では、五年に閏が二度あるので、それに因んで、今度は地策すなはち机上に置いた地策を右手に取つて、それを左手を以て、前と同様に四つづつ數へて(以上三營の後半)その残りを、さつきの扚に歸結せしめる。(以上四營の後半)かくして扚に歸した策數は、かならず五か九かになる。(以上第一變、詳しくいへば四營して一變となる)この五か九かの策を、四十九策から

差引いた残りの四十策か四十四策かに就いて、以上の方法を繰返せば、この度扱に集まつたものは、かならず四か八かである。(以上第二變)かくて、第一變の時の残策と、第二變の時の残策とを、全策から引いた残りに就いて、同様の方法を繰返せば、この時の残策も、かならず、四か八かになる。(以上第三變)ここに於て、都合三變の残策を四十九策から除した残りに就いて、更に四除すれば、その結果は、六か七か八か九か(すなはち四の六・七・八乃至九倍)である。然るに、その結果が四の六倍の時は、それを老陰といひ、七倍の時は、少陽といひ、八倍の時は、少陰といひ、而して九倍の時は、老陽とするので、その何れかに依つて、はじめて第一爻が出来るのである。かくの如く、四營して第一變となり、第二變第二變と、すべて三變して一爻が出来るので、一卦を生ぜしむるには、三六・十八變する必要がある。かくてこの結果を算木さんぎにうつして生じたところの卦を、遇卦ぐくわといふのであるが、この遇卦中の爻が、老陰なれば、變じて少陽となり、老陽なれば、變じて少陰となる必然性を有するので、その裏卦うらげ(算木には、はじめから表と裏とに、それぞれしるしがつけてある)のことを之卦しくわといふが之卦の之はゆくといふ意味である。ここに於て、占筮者はこの遇卦と之卦とに就いて、すでに述べたと

ほり、或は一卦全體に就いて、或は上下二體の關係に就いて或は各爻に就いて或は各の關係に就いてその他いろいろと熟察考慮して吉凶を判断するのである。而して、この場合に於ける占筮者の態度は、申すまでもなく、敬虔そのものでなければならぬ。(第一項参照)

大正十二年七月望蘇山樓に於て

高森良人識す

目次

筆者から.....

初校を終へて.....

解題.....

現代語訳 辭.....

現代語訳 周易.....

上經.....

☰ 乾爲天.....

☳ 水雷屯.....

☱ 水天需.....

☵ 地水師.....

☷ 坤爲地.....

☶ 山水蒙.....

☵ 水天訟.....

☵ 水地比.....

四

六二

七

八二

四一

五三

六七

七六

八五

☳ 風天小畜	二八九	☳ 天澤履	二九四
☷ 地天泰	二九六	☷ 天地否	二一〇
☲ 天火同人	二〇七	☲ 火天大有	二一二
☶ 地山謙	二二七	☶ 雷地豫	二二三
☳ 澤雷隨	二二六	☳ 山風蠱	二三一
☷ 地澤臨	二二六	☷ 風地觀	二四〇
☲ 火電噬嗑	二四	☲ 山火賁	二四九
☶ 山地剝	二五四	☶ 地雷復	二五九
☳ 天雷无妄	二六四	☳ 山天大畜	二六九
☳ 山雷頤	二六四	☳ 澤風大過	二七〇
☵ 坎為水	二八五	☵ 離為火	二九〇

下經

☳ 澤山咸	二九六	☳ 雷風恆	二〇二
☶ 天山遯	二〇七	☶ 雷天大壯	二二三
☲ 火地晉	二二七	☲ 地火明夷	二三一
☳ 風火家人	二二六	☳ 火澤睽	二二〇
☵ 水山蹇	二二六	☵ 雷水解	二四一
☶ 山澤損	二四六	☶ 風雷益	二五二
☳ 澤天夬	二五七	☳ 天風姤	二六二
☶ 澤地萃	二六七	☶ 地風升	二七二
☳ 澤水困	二七六	☳ 水風井	二八四
☲ 澤火革	二八九	☲ 火風鼎	二九四



現代語譯

繫

辭

高森良人譯著

目次終

☳	震爲雷	……	三〇〇	☶	艮爲山	……	三〇五
☱	風山漸	……	三〇九	☳	雷澤歸妹	……	三二四
☳	雷火豐	……	三一九	☱	火山旅	……	三三四
☴	巽爲風	……	三一九	☱	兌爲澤	……	三四四
☱	風水渙	……	三三九	☱	水澤節	……	三四四
☱	風澤中孚	……	三四九	☳	雷山小過	……	三五四
☵	水火既濟	……	三六一	☵	火水未濟	……	三六六

繫辭

繫辭といふのは、卦とか爻とかの説明の辭で今の經文である。そして、それは、文王や、周公が述べたものであるとされてゐる。けれども、ここにいふところの繫辭は、それとは全然異つて、解題のところでも一言したとほり、周易の註釋なり解説なりに相當する十翼中の一つであつて、宋以前までは、孔子の述作であるとされてゐたものである。故に、經に對する傳であることからして、繫辭傳と通稱されてゐる。且又、それは、上下の二篇に分けてあるが、その中でも、上傳の方は、人に依つて、或は十一章としたり、或は十二章としたり、或は又十三章としたりするが、今ここでは、朱子の分段法に従つたけれども、第九章だけは除くこととした。(下傳はみな十二段になつてゐる。)ところで、繫辭傳の内容はといふならば、つまり、易そのものの大要を概説したものであつて、哲學的色彩を、もつとも多く含んでゐるといふ意味に於て、撰述の年代からすれば、經文に比べてすつと後になるけれども、兎も角も必讀すべきものである。

天は尊くして上に在り、地は卑しくして下に在るといふことに因んで、乾坤の二卦は定められたものであり、又、天地萬物には、おのづからにして高卑があり、順序段階があつて、條理整然として、一絲紊れない低のものであるのに則つて、爻は初爻から始まつて、二爻三爻四爻五爻上爻といふ風に、卑いところから高いところに及ぼして行くのみならず、その間には、儼然として貴賤の段階があつて、何物を以てしても變更することは出来ないやうになつてゐる。而して、陽は、常に、活動的であり、積極的であるのに反して、陰は、常に、靜止的であり、消極的であつて、剛健の性質と、柔順の性質とが判然として分れてゐるのである。かくして、事々物々は、その本質に従つて一定の方向があるので、善は善に與し、惡は惡に與するといふやうに、同類相聚まり、各群對立することに依つて、易の卦爻の吉凶も生ずるわけである。而して天には日月星辰の象が生じ、地には山川草木等の形が生じて、その間に必然的に種々の變化があるのであるが、易の卦爻は、それに準據して、陰は變じて陽となり、陽は變じて陰となるやうに仕組まれてある。かくの如くにして、陰陽柔剛の兩者は、互に交り感じて四象となり、八卦となり、而して成立したところの八卦は、更に各々推し動かして六十四卦を生じて、易卦

の變化を生ずる次第ある。然り而して萬物を鼓舞振作せしむるには、震の雷と離の蹇との作用を以てし、又、それ等を潤ほすためには、巽の風と坎の雨との作用を以てし、更に又、離の日と坎の月とは、みなそれぞれ運行して、或は寒い冬となり、或は暑い夏となるといふ風に、循環して窮まりなきものである。且又、乾道たる陽の氣を稟けたものは男性となり、坤道たる陰の氣を稟けたものは女性となり、而も、その乾なるものは、氣を生ずることを主どり、坤なるものは、それを受くることに依つて物の作成に任ずるものであるが、天地が萬物を生々化育する場合に於ては、何等の困難もなく、極めて平易に、又何等の煩雜もなく、全く簡單である。故に、人間が種々雜多なる作爲を試みる場合に於て、もしもかの乾道の如く、平易であれば、明白にして容易に測り知ることが出来るし、又、かの坤道の如く、簡單であれば、わけなく従ひ得られるであらう。かくして、平易にして容易に測知することが出来れば、その結果は心を同じうして相親しむることとなり、又、わけなく従ひ得るやうであれば、その結果は、自然と協力者が多くなつて来て、萬事が成功するわけである。而して、心を同じうして親しむやうになれば、その結果は、永久に持續することが出来るし、萬事が成功に終るときは、層一層と

増大累積するであらう。而も、永遠に持續せらるべきものは、賢人の徳であつて、成功増進すべきは賢人の事業であるのである。或人が、もしも、かくの如き偉大なるところの天地の道に則ることが出来るならば、それこそ、その人は、賢者といふべきであらう。又、天地の道が、以上のべたやうに、極めて平易にして且簡單であればこそ、その結果は、萬事その道理の宜しきを得ることが出来るであらうし、萬事その理の宜しきを得ることが出来るやうな聖人にしてはじめて、偉大なる天地の間に生存して、その化育を翼賛することが出来る次第である。元來、易は、聖人によつて作られたものであるが、その聖人は、その易に卦を設けて、その卦面に表れたところの形象を觀た上で、それに適當した説明の辭を作り、然る後吉凶の理を闡明にしてゐる。而して、剛と柔とは互に變化推移せしむるものであるが、かくの如くにして、變化した結果として現はれるところの吉凶といふのは、それぞれ、得失、すなはち事の成功と不成功との結果の象であり、悔吝といふのは、それぞれ憂虞、すなはち一旦悪行をなした場合に於て、それに対する憂慮と玆れ虞たのしむとの結果の象であるのである。又、變化といふのは、進退すなはち剛から柔にまで進み、その柔の極は、また更に剛にまで退いたところの結果の象で

あり、剛柔といふのは、それぞれ晝夜の象でもある。且、六爻が變化するのは、三極すなはち天地人三才の範圍内に於て行はるるものである。この故に、君主は易道の秩序整然たる場所に則つて、事物事象の盛衰進退の必然性を會得して、みづから安んじ、含蓄ある内容を有するところの爻の辭を愛玩する次第である。かくして君子が安居する場合に於ては、易にあらはれたところの諸相を觀て、その説明の辭を熟讀玩味し、一旦活動する場合に於ては、陰陽柔剛の變化する様を觀て、その占筮の意義を覺つて、それを玩味する次第であるが、その結果は、天祐を得て、萬事成功して行くとして可ならざるなしといふやうなことになるものである。

象すなはち卦辭は、一卦全體に現はれたところの形象の意義をを解説するものであり、爻の辭は各爻の變化の意味を述べたものであり、吉とか凶とかいふのは、ある事の結果の得失成否を意味し、悔とか吝とかいふことがあるが、その悔といふのは、全部吉といふわけではなくてなほ多少の疵があるもので、それをよく改むる場合のことであり、吝といふのは、全部凶といふわけではないが、兎も角も何程かの疵があることは明かにもかかはらず、それを改むることが出来ない場合のことをいふのである。又、咎無しといふのは、本來からすれば咎責を免れない

性質のものではあるけれども、その言行よろしきを得るために、おのれを過失をよく補ふことが出来るものであるといふことを意味する。かくて、貴賤上下を區別して配別するのは、六爻中の各爻の位置が、上に在るか下に在るかに依つて定めらるるものであり、大すなはち陽であるか、小すなはち陰でかを決定するのは、例へば、三爻の中、陽が陰よりも少い時は、その卦は、陽であり、陰が陽よりも少い時は、その卦は陰であるといふ工合に、各卦成立の状態に依るものであり、一卦もしくは一爻の吉凶を辨明する場合に於ては、それぞれ卦爻の辭を以てするものであり、而して又、悔とか吝とかになることを憂へるならば、それはいまだ事の幾微である時に於てすべきであり、みづから進んで事を爲して何等の咎責をも蒙らないですむといふのは、みづから自己の言行に對して、悔悟反省をして、よく過を補つて行かうとする殊勝な心がけがあるからである。さればこそ、卦には小大の陰陽の二つがあり、その卦爻の辭にも、險難な性質のものと、安易な性質のものとがあつて、而も、その辭は、人々に向つてそれぞれ適從すべき所を具體的に指し示してゐるものである。

聖人が易といふものを創始した歴史から考へても分るやうに、易といふものは、天地の道に

準則してゐるので、易そのものの含蓄するところの内容は、天地の道を網羅して餘蘊なきものである。この意味に於て、仰いで日月星辰などの天文を觀、俯して山川草木等の如き地理を察する場合に於て、易を以て解釋すれば、天地間に於ける有形無形のあらゆる存在物の然る所以を知ることが出来るし、又、死生の問題の如きも、始を原もとねれば、終に反り、終に反りもとむれば、またその始を知ることが出来るといふ天地陰陽の道とするところの變化の原理から解釋がつくし、又、純粹なる陽の精氣が凝り集つて物を形造り、散じてふたたび變化を爲すことがらして、屈伸消長をその本質とするところの鬼神の情狀も知ることが出来る。易は、天地と似通つてゐる。故に、易は、天地の道に違ふことはない。易道を體認して、あまねく萬物を明識してゐるのみならず、仁道を以て天下の救済に當つてゐるところの聖人君子は、勿論、何等の過もないわけである。おのれの境遇上、あらゆる方面の行爲をなしながら、何一つとして非道徳的な不合理なことに流れるやうなことしないで、もつばら命を樂しみ、且自己の職責を自覺するために、何等の憂患も起らぬし、おのれ棲息の場所に安んじ、何等の不仁をもなさないので、よく愛するわけである。聖人は、窮まりなき天地の化育に、爰をつらね卦を設くることに

依つて、一定の類型を與へたり、限度を與へたりして、中庸を失はしめないやうにすると同時に、他の方面に於ては、萬物をして、ことごとく、その性能に應じそれを完成せしめて餘蘊ないばかりでなく、陰陽晝夜の變化の道理に通曉してゐるので、陰陽不測なるさすがの鬼神も、自由に一定の方針態度を定むるわけにも行かないのに反して、易道それ自身は消長變化に、何等の制限もなく、何等の形體もなく、極めて自由に、極めて廣大なものである。

一たびは陰となり、一たびは陽となつて、往來變化無窮にして萬物を生成せしむるものをさして道といひ、至善なる天の賦與するところの道を、人が繼承する時に、それは善となり、その善の完成するものが性である。故に、あらゆる人の性は、共通してひとしく善である。然るに、人に依つて、その見るところも相違して來て、仁者はそれを仁にいひ、知者はそれを知といふのであるが、衆愚に至つては、日常それに依つて行動してゐながら、遂に何物なるかを自覺せずして終る。さればこそ、君子の履行ふところの道を察知し得る者が少いわけである。天地は、その道をば、或は仁の行動に顯はし、或は變化作用の中に藏し、或は萬物を生生し鼓舞振作せしめるにもかかはらず、聖人が民を治むるやうに、心にかくることもなくして、無心に、

自然に行ふものである。故にその盛徳大業の至れり盡せりであることを察すべきであらう。あらゆる物を豊富に所有することが、大業であつて、日に日に新にして間斷なく行ふことが、盛徳である。而して、陰陽交互に生々して變化無窮なることをさして易といひ、天に於て形象をなす時、それを乾といひ、地に於て造化の實をあらはすのをさして、坤といひ、數を推極して未來を豫知することを占筮といひ、窮まりて變じ、變じて通ずるは、事の生ずる所以である。かくの如く、陰陽不測なるものは、これを神妙不可思議なるものと稱する外ないのである。

一體、易は、まことに廣く大いなるものである。これを横に考へて見るならば、無限の廣がり有りし、何物を以てしても、それを禦ぎ止めることは出来ない底のものであるが、もしもこれを手近な身邊に就いていふならば、退進命に安んじて、靜にして且正しきところの道である。更に、これを縦に考へて見るならば、天地の間を通じて、何一つとして具備しない物はない。而して乾は卦を以ていへば、靜止の状態に在るときは、純粹無雜であるが、變動して一たび活動する時は、眞直に伸びて、決して撓むやうなことはない。かくの如くにして、乾道生生の功は無限にして盡きることはないのである。然るに、坤は靜止してゐる場合に於ては、集合して

開かないけれども、變動が起つて活動する時は、開放的となつて、乾の施を受くるので、萬物育成の範圍も、従つて廣大なものである。この意味に於て、乾坤兩卦の廣大は、天地のそれに比ぶべく、その變通は、春夏秋冬の四時に比すべく、その陰陽消長の状態は、日月交々照すことに比すべく、而してその簡易平明なる善行は、聖人の至徳に比すべきものである。

孔子はいふ、易道は無上のものである。故に、聖人は、易道によつて崇高なる徳を涵養するとともに、廣大なる業績を成就せんと欲する次第である。而も知識の高きを致し、謙讓の態度をとることに依つて、その眞價を發揮する。而して、知識を高めることは、天に效なまひ、禮を卑ひうすることは、地に法するものである。易道の門戸ともいふべき天地が、一定の地位を設けて、それに居らしめるので、易道はその中行はるる所以である。かくの如く、すでに成就せる人間固有の至善なる人間性をば、更に涵養の工夫を以て保存して失はないやうに努力することが、道義そのものの根源である。

聖人は、天下の深奥なる道理を體認したる後、その抽象的なる道理をば、他に適當なる物にぞらへて、それを具體化して、その事物の宜しき所に象つて他の物に比較して人に明示する

ものである。この意味に於て、易の象といふのは、理をあらはすものといはなければならぬ。聖人は、天下事物の變動を見れば、それ等の事物の會通集散の實情をよく観察して、それに應じて常典とすべき禮法を行ひ、説明の辭を設けて、その吉凶を斷定するものである。故に、これを爻といふのである。かくの如く、聖人は、天下に於けるもつとも深奥なる道理をば、具體的に説明して、理解し易からしむるを以て、何等厭惡排斥するものもないわけであり、天下に於て無限に變化する事をば、典禮といふものに依つて斷定するために、混亂に陥るやうなことはなくてすむわけである。かくして具體的の物になぞへて言ひ、熟慮省察して然る後行動することに依つて、變化に適應して何等のあやまちもなくなるものである。

「鳴鶴、陰に在り、其の子之に和す。我に好爵有り。吾爾と與に之を靡たん。」といふことが風澤中孚の九二の爻のところに在る。それを、孔子は、次のやうに説明してゐる。君子が、その室に居て、何等かの意見を發表する場合、もしそれが善であれば千里外の人々すらそれに應ずるに至るものだからして、近い所の人々は申すまでもない事である。然るに、その言が不善であれば、それと正反對に、近遠を問はず、反對するものである。君子の口から出たところの

言は、遂に、人民にその結果を及ぼし、その行の結果は、遠方に於てあらはるるものである。言行は君子の樞機であり、その樞機は榮辱を主とするものである。かくして、君子の言行は、遂には、天地をも動かすこととなるものなれば、慎重にも慎重を加へて發しなければならぬ。又「同人先には號咷して、後には笑ふ。」といふことが、天火同人の卦の九五の爻のところに在る。それに對する孔子の解釋は、次のやうである。君子の道といふものは、時と場合によつて違ふ。すなはち、出でて仕へることもあれば、退いて處士となることもあり、又沈黙な守ることもあれば、意見を發表することもあるといふ風であるが、要するに、その態度は、終始一貫してゐる。二人が同心協力するときには、その鋭利なること金鐵でも斷切ることが出来るやうに、心を同じうする者の意見は、蘭の如く馥郁たる香氣を發するものである。又、澤風大過のところに「初六。藉くに白茅を用ゐる。咎無し。」といふことがあるが、孔子は、それを解説して、それを地上に置けば、それで澤山であるのに、白い茅を藉いて、それに載せて置くといふのは、慎の至りである。して見れば、何の咎があらう。一體、茅といふものは、至つてつまらぬものではあるけれども、時には祭の用具にも役立つではないか。この方法を以て事に處する

ときは、決して失敗するやうなことはないといつてゐる。更に、地山謙の卦の九三のところには、「勞謙す。君子終有り。吉なり。」といふことがあるが、それに對する孔子の解釋は、次のやうである。勞して伐らず、功有りて徳としないのは、その人の徳が至つて厚いからであるが、それは功績を立ててゐながら、人に卑下するものごとをいふのである。一體、徳は盛んでなければならぬし、禮は恭しくてなければならぬ。謙讓であれば、おのれの地位を保つことが出来るものである。而して又、乾の卦の上九のところには、「亢龍悔有り。」といふことがある。それを孔子は、次のやうに述べてゐる。階級からすれば、貴いけれども、何等の地位も得てゐない上に、みづからあまりに高くとまつてゐるので、人民の心を得ることも出来ず、賢人が下位にありながら、その輔を受けることも出来ないため、かくの如き境遇の人が進んで活動すれば、後悔するやうになるものである。而して更に、水澤節の卦の初九のところには、「戸庭を出でず。咎無し。」といふことがある。それを孔子は一體、争亂が起るのは、人の言葉からである。故に、人君の言葉が、その嚴密を失つた結果は、下臣を失ふことになるし、臣下ならば、一身を滅ぼすやうなことになるし、機密の事は嚴重にしないと禍害を招くことになるのからし

て、君子は慎重と嚴格とを守つて、輕々しく言葉を發しないものであると説明してゐる。又、孔子は、他の場合、次のやうなこともいつてゐる。一體。易の作者は、盜賊の心得でもあつたものか、易には(雷水解の六三)「負ひ且乗る。寇の至るを致す。」といふことがあるではないか。而して、その負ふといふのは、小人の事で、乗るといふのは君子の乗物である。小人でありながら、君子の器たる乗物に乗るからして、盜賊がその財寶を奪はうとするわけである。かくの如く、上に立つ人が怠慢で、下民が狂暴を肆にすれば、盜賊はその隙に乗じて伐たうとするのは當然のことである。元來財寶を大切に藏つて置かないからして、人に盜心を起さしめるし、妖豔なる容姿をなせばこそ、人の邪淫の心を挑發せしむるものである。易の經文に、負ひ且乗る。寇の至るを致すといふのは、みづから盜賊を招いた場合のことである。

易には聖人の道が四つある。すなはち、何事か自己の意見を發表しようとする者は、易の内容を文章を攻究して、それをおのれの規範とする。又何れの方面に向つてか行動しようとする者は、易の變化を尊重して、それに準據して、おのれの行動に不合理なからしめようとする。若し又、何等かの器物を製作せんとする者は、易の卦象を熟察することに依つて、器物の形狀を整

へる、更にもし卜筮を試みんとする者は、卦爻の辭に鑑みて、將來を豫測するが如きそれである。故に、君子にして何等かの行爲をなさんと欲する者は、事の吉凶可否をば、占筮に托する時に於ては、易は筮者の命辭を受くるや、あだかも響の音に應ずるが如く、事の遠近幽深を問はず、直に將來に於ける結果の可否を告げ知らせるものである。而して、それは、天下に於ける至精に應じたものに外ならぬ。或は三だひし、或は五だひするといふやうに、しばしば、四十有九の著策しやくを手に取つて、その數を錯雜させたり、綜合したりして、前後十八たびの變化に依つて卦を成し、天地の文ぶんを造り、錯綜の數を極めて、遂に天下の森羅萬象を定むるものであるが、それは、天下の至變なるものに於てのみ可能である。のみならず、易それ自身は、何等の意思も、何等の作爲もあへてせずして、ただ、これ、寂然不動的のものであるが、筮者が、自己の心を靜虚にして、著策をあやつるときは、感じて卦を成し、天下にありとあらゆる事物事象の吉凶を明示するものであるが、それは、天下の至神なるものでないかぎり、到底不可能なことである。一體、易といふものは、それによつて、聖人が、未形の幽玄なる道理を推極するとともに、未顯の微動をば、その幾微に於て攻究する所以のものである。かくの如く、幽玄

深奥の理を極むるが故に、天下のあらゆる思念に通ずることも出来るし、幾微の際を攻究し得るの結果は、よく天下のあらゆる事件を成就せしむることも可能であり、更に又、神妙不測なる能力があるが故に、疾たからんことを期待せずしておのづから速に、行いて求むることを待たずして、おのづから至るものである。さればこそ、孔子も、易に聖人の道四ありとは、これこの謂かといつてゐる。

孔子はいふ。一體、易といふものは、如何なることを爲すものであるかと考へて見るのに、聖人は、易を創製して、人民をして、卜筮することに依つて、物の蒙を開き、理を闡明にして以てそれを實際の場合に應用して、さまざまなる事業を成さしめるばかりでなく、易の卦爻の中には、天下のあらゆる道を含ましているといふことが易の本質である。故に、聖人は、易によつて天下民衆の思念に通曉し、以て世の中の事業を定め天下の疑義を斷定するものである。この意味に於て、卜筮に用ゐるところの著もしくは筮竹は、圓くして神變することを以てその徳となし、卦は方にして知といふことを以てその徳となし、六爻の意義は、變化して、その結果、吉凶如何を告げ知らせるに存する。かくて、聖人は、以上のべたところの著と卦と爻の三

者を以て心を洗ひ清め、退いて思を事の精密にまで藏めて得たる結果を以て、吉凶を豫知することに依つて、民と患を同じうするものである。又、聖人の神妙なる直感のはたらきは、以て未來を豫測し、その知力は、以てよく過去の事柄を記憶にとどめるものであるが、かくの如きことは、昔の聰明叡知にして刑戮を用ゐずして民を畏服せしめたところの人にしてはじめて可能である。是を以て、聖人は、天の道を明識することに依つて民のさまざまなる事件を察知し、神物なるところの蓍策や龜甲を以て、民の吉凶を事前に豫知せしむるものである。聖人は、易を以ておのれの心を齋戒して、その徳を神明にする次第である。この故に、戸を闔ちて靜かなる筮坤といひ、戸を闢いて動くを乾といひ、或は闔ち或は闢く有様をば變といひ、變化窮まりなきことを通といふのである。而して卦爻の如く、兆きざしがあらはるることを象といひ、蓍策の如く形があるものをば器といひ、聖人は占筮の法を制定してそれを用ゐ、民は、日夕、妙用不測なるものを用ゐてその利に頼ることが出来る。この故に、易には太極たいきよくといふ一元氣があつて、それが兩儀すなはち陰陽といふ一對を生じ、その兩儀は、春夏秋冬に配せらるるところの四象を生じ、而して、その四象は、さらに乾兌以下の八卦を生じ、ここに吉凶を定めて去就を決せし

むるといふ大業を生ずるものである。この故に、象を成すものは、天を以て第一とし、法を效すものは、地を以て最大なるものとする。又、陰陽の變通といふことは、四時の推移を以て最尤なるものとなし、懸示せる象の中に於て、もつとも著明なものは、月日であり、崇高の點に於ては、天子といふ尊貴の位に居つて、天下の富を所有することが、その第一であり、あらゆる物を備へ、あらゆる用を致し、形象を立ててそれに法つてあらゆる物を作成して、天下人民の利用厚生をはかることに於ては、聖人より大なるはなく、而して又、幽玄にして現はれざるものを探し、隠れたるを索め、深きを鉤にし、遠きを致して以て天下の吉凶を定めて、天下の人々をして、黽勉努力せしむる點に於ては、占筮龜卜より大なるものはないのである。この故に聖人は以下のぶるところの四事、すなはち、天が神物たる蓍龜を生じたること、天地は變化窮まりなきものであること、天が日月の象を垂れて吉凶を顯はしたること、及、昔黄河が所謂河圖なる一種の圖を出し、洛水が所謂洛書といふ一種の書を出したことなどに則つて、易を創製したものである。而して、易に少陽老陽少陰老陰の四象があるのは、示す所以であり、解説の辭を設くるのは、告ぐる所以であり、これを定むるのに吉凶を以てするのは、疑惑を斷定する所

以である。

火天大有の卦の上九に、「天自ら之を祐く。吉にして利しからざることを無し。」といふことがある。それに對して、孔子はいふ。「祐とは助なり。天の助くる所の者は順なり。人の助くる所の者は信なり。信を履み、順を思ひ、又以て賢を尙ぶなり。是を以て、天自ら之を祐く。吉にして利しからざることを无きなり。」と。孔子がまた「易の書は充分に言ひ盡してもゐないし、用語そのものも亦、充分に意を盡してゐないものである。」と言つたのに對して、或人が「然らば聖人が易を作つた趣旨は、遂に徹底的には了解出来ないものであらうか。」と問うた。そこで、孔子は答へていふ。「いや、さうではない。聖人は物の形を假つて意を盡し、卦を設けて事の實否を闡明して餘蘊なからしめ、又含蓄ある卦爻の辭を添へてその言を盡し、陰陽變化の理にもとづいて進退去就を知らしむることに依つて利を盡して餘すことなく、又、鼓舞振作して、人々をして爲すべきことを爲さしむることは、これ、とりもなほさず、神妙不測の能力を盡すものといはなければならぬ。」と。乾坤の二卦は、易の蘊奥とも申すべきであらうか。乾坤二卦の序列配合の中に、易は包含せらるるものなれば、乾坤二卦の毀損は、やがて、易そのものの消滅となり、易そのものの存在を見ること能はざる時は、乾坤の用も屏息して、變化も行はれなくなるのは、勿論のことである、この故に、形よりして上なる者をさして道といひ、形よりして下なるものを器(物)といひ、自然の化によつてそのよろしきを裁制することをば變といひ、それを天下に推し及ぼして實現することを通といひ、それを天下の人民に活用するときは、これを事業といふのである。(この下の一句は第八章の重出なれば略す)およそ、天下の幽玄にして見るべからざる道理を攻究推極することは、六十四の卦に於てなすべく、天下の變動を説いて、それを鼓舞するには、卦爻の辭に於てすべく、自然の變化に因んで、事の宜しきを得しむるには、六十四卦の變化といふことに於てすべく、現實の事に推し及ぼすに於ては、萬事亨通する點に於てすべく、神妙不測にして、而もそれを闡明ならしむるには、その人の如何に存し而して、暗黙の間に事を成就し、無言の裡に人の信を博することは、徳行に存するのである。

繫辭下

乾兌離震巽坎艮坤の八卦が、一ならび成れば、その中には必然的に天地間のあらゆる形象が存在することとなる。けれども、獨陽は成らず、獨陰は生ぜずといふわけで、そこで、以上の八卦を各々二つづつ重ねて、八八・六十四卦となし、各卦六爻を備へて、爻の意義を有するに至る。かくて、その中には、陽爻もあり、陰爻もあつて、それ等の陰陽柔剛の六爻が、互に排盪し、順遷する結果として、さまざまなる變化を含むに至る。かくして、卦爻の辭を設けて教を立てて經文となすのであるが、その中には、勿論、人間生活に於けるあらゆる云爲動作に對する吉凶の判定を含んでゐるのである。ところで、吉凶悔吝といふものは、人生に於ける云爲動作から生ずるものである。而して各卦に於て、その初、三、五は、陽の位と定め、二、四、上は陰の位と定めてゐるのは、根本を確立するものであり、又、各爻が、皆陰陽相變通するのは時の宜しきに趣くものである。人事のあらゆる吉凶は、要するに貞正といふことを以て勝たぬものはない。天地の道は常に、正を以て人に示し、日月の道は、正を以て永遠に明かに 天

下の動もことごとく正の一事に歸看するものである。一體、乾は、人に向つて、易といふことを明示し、坤は人に簡といふことを闡明するものである。爻に奇偶があるのは、乾坤天地の示すところに效ふものであり、卦象はそれに象つたものである。一卦内に動いて往來變化する結果として、爻象は卦面にあらはれ、吉凶は外界に於いて現實の事をなす上にあらはれ、變じてそれを通ずる時に於ては、それに對する功業あらはれ、その辭を玩味すれば、聖人の眞情があらはれるであらう。天地の大徳は、萬物を生生してやまぬことであり、聖人の大寶とするところのものは、位を得て、以て萬物をして、おのおのその生を遂げしめることである。然らば、何を以てこの寶位を保持するかといふに、それは、申すまでもなく、仁である。又、何を以て人を聚むるかといへば、それは財を散じて民に施すことに存する。而して、財政を理めて人民の經濟生活を潤澤にし、辭を正しくして民に教育を施し、刑罰を課して民の非を爲すことを禁ずることが、とりもなほさず、義である。

昔、包犧氏が天下に君王として臨んだ頃、或は天を仰いで象るべきところを觀察し、地に就いては、人文はさらなり、鳥獸の文、地の宜しきを觀察して、その法るべきところを探求し、

又、近くは身體の各部について、遠くは物に就いて考察したる結果、ここに、はじめて、八卦といふものを作り、以て深く神明の徳に通じ、以て萬事萬物の眞情に通曉して、それを類別し或は又、繩を結んで網器を作つて、鳥獸を取つたり、魚を取つたりするのは、離の卦が、あだかも、二つの目がついて、物がそれにかかつてゐる象になつたものであらう。然るに、包犧氏が没して神農氏が作るに及んで、木を削つて耜（き）を作り、木を揉（た）めて耜の柄を作つて、耕農の利を天下の人民に教へたのは、多分益の卦に因んだものであらう。又、日中に市を爲して、天下の民を招き、天下の財貨を聚めた上で、各自交易したる後、退きかへるのは、恐らく、噬嗑の卦から思ひついたのであらう。かくて、その後、神農氏が没して、黄帝や帝堯帝舜などの聖君が作るに及んでは、すべての事物をして、その變すべきものを變ぜしむることに依つて達成せしめ、以て人民をして倦まざらしむることが出来たのである。而も、神妙不測なる變通の結果は、誰一人として、その宜しきに感謝しないものはなかつた次第である。易といふものは、窮まれば變じ、變ずれば通じ、通ずれば久しきものである。是を以て、「天自ら之を祐く。吉にして利しからざるは無し。」といふ所以である。黄帝堯舜が、衣裳を垂れて、無爲にして天下を

よく治めたといふのは、蓋、乾坤二卦の易簡といふことに鑑みたのであらう。又、木を刳つて舟を爲り、木を刳つて楫を爲り、舟楫を利用して通行し得ざるところの水路をも渡すやうにしたのは、惟ふに、漁の卦に因んだのであらう。又、牛に車を牽かせて、重い荷物を運んだり、馬に乗つて遠方を往來したりして、天下に利益を與へたのは、恐らくは、隨の卦に依つたのであらう。又、門を二重にも三重にもした上で、柏子木を打つて暴客を期待して防禦につとめるのは、蓋、豫の卦から考へたものであらう。又、木を斷つて杵を爲り、地を掘つて臼となし、臼や杵を利用して、萬民を濟ふのは、蓋、小過の卦に鑑みた結果であらう。又、木に弦をつけて弧となり、木を刳つて矢となし、弓矢を利用して、天下を威壓するのは、蓋、睽の卦に測つたものであらう。又、上古は、穴居したり、野宿したりしてゐたが、後世の聖人は、それを以て不可となし、遂に宮室を發明したのであるが、上方の棟や、下方の宇などが備はつて、風雨に備へるやうにしたのは、蓋、大壯の卦に因んだものであらう。又、古の埋葬といふものは、薪を以て厚く包んで野原に葬りつばなしで、その上に土を盛りあげて、墳とするやうなこともせず、樹を植ゑてしるしをつけるやうなこともしないし、喪期なども、何等一定の期限もなかつたので、後世の聖人は、それを野蠻視して、遂に、棺槨を使用することにしたのは、蓋、大過の卦に鑑みてであらう。又、上古の政治は、文字もないので、繩を結んで、あらゆることの記憶に資したのであつたが、後世の聖人は、文字や符信を發明して、それにかへたので、ここに、はじめて、百官有司もそれを利用してよく治め、萬民もよく明察なることが出来たのであるが、それは、恐らく、夬の卦によつたものであらう。

この故に、易の卦は、萬物の象であるが、その象といふのは、像るといふことである。而して、象は、一卦の材料で、一卦全部の意義を述ぶるものであり、爻は、天下のあらゆる變化推移に效ふものなるが故に、吉凶も生ずれば、悔吝もあらはるる次第である。

一體、陽卦には、陰爻の方が陽爻よりも多く、陰爻は、その逆であるが、如何なる理由によるものであらうか。それは、陽卦は奇數あるが故に、一陽二陰、すなはち五より成り、陰卦は、偶數から成立するが故に、二陽一陰、すなはち四よりなるものをいふのである。而して、陰陽兩卦の德行は、如何なるものであらうか。陽は君で、陰を民とするところの陽卦は、一君にして二民であつて、すなはち、君子の道であり、陰卦は、二君にして一民であつて、小人の

道となるわけである。

澤山咸の九四には、「憧憧として往來すれば、朋のみ爾の思に従はん。」といふことがある。孔子は、それを解釋して、次のやうにいつてゐる。「天下何をか思ひ、何をか慮る。天下、歸を同じうするも、塗を殊にするのみ。一致するも、慮を百にするのみ。天下、何をか思ひ、何をか慮る。日往けば、則、月來り、月往けば、則、日來る。日月相推して、明生ず。寒往けば、則、暑來り、暑往けば、則、寒來る。寒暑相推して歳成る。往くとは屈するなり。來るとは信びるなり。屈信相感じて利生ず。尺蠖の屈するは、以て信びんことを、求めんがため、龍蛇の蟄するは、以て身を存せんがため、精義、神に入るは、以て用を致さんがため、用ゐるところを利して身を安んずるは、以て徳を崇うせんがためのみ。此(精義と利用と)を過ぐる以往(以上)は、未、之を知ること或らざるなり。神を窮め、化を知るは、徳の盛んなるものなり。」と。又、澤水困の卦の六三に、「石に困む。蒺藜に據る。其の宮に入るも其の妻を見ず。凶なり。」といふことがあるが、それを、孔子は、解釋して、「困しむべき所に非ずして困むときは、名、必、辱めらる。據るべき所に非ずして據るときは、身、必、危し。既に辱められ、且、危く、死期

將に至らんとす。妻其れを見ることを得べけんや。」といつてゐる。又、雷水解の卦の上六には「公用て隼を高備の上に射る。之を獲て利しからざることを無し。」といふことがある。それを、孔子は、「隼とは禽なり。弓矢とは器なり。之を射る者は人なり。君子は器を身に藏して、時を待ちて動く。何の不利か之れ有らん。動いて括れず。是を以て、出でて獲ること有り。器を感して動く者を語ふなり。」と解釋してゐる。又、火雷噬嗑の卦の初九に就いて、孔子は、「小人は不仁を恥ぢず、不義を畏れず、利を見されば勸まず、威ならざれば懲りず。小しく懲らして大いに誠む。此れ小人の福なり。易に曰く、校を履みて趾を滅す。咎無しとは、此を之れ謂ふなり。」といひ、又、同卦の上九に就いては、「善、積まざれば、以て名を成すに足らず。惡、積まざれば、以て身を滅すに足らず。小人は、小善を以て、益無しと爲して、爲さざるなり。小惡を以て、傷る無しと爲して、去らざるなり。故に、惡は積りて、掩ふ可からず、罪は大きくなりて、解く可からず。易に曰く、校を何ひて耳を滅す。凶なり。」と解釋してゐる。又、天地否の卦の九五に就いては、「危しとする者は、其の位を安んずる者なり。亡びんとする者は、前の存を保つ者なり。亂れんとする者は、其の治を有つ者なり。是の故に、君子は、安けれども

危きを忘れず、存すれども、亡びることを忘れず、治まれども、亂を忘れず。是を以て、身安
まして國家保つ可きなり。易に曰く、其れ亡びなん、其れ亡びなん。包桑に繋れり。」といひ、
火風鼎の卦の九四に就いては、「徳薄くして位尊く、知、小にして謀大に、力、小にして任重
ければ、(禍に)及ばざること鮮し。易に曰く、鼎、足を折り、公の餽を覆す。其の形、渥たり、
凶なりとは、其の任に勝へざるを言ふなり。」といひ、又、雷池豫の卦の六二に就いては、「幾を
知るは、其れ神か。君子は、上に交つて諂はず、下に交つて、潰れず。其れ幾を知るか。幾は、
動の微にして、吉の先見はるる者なり。君子は、幾を見て立つ。日を終ふるを俟たず。易に曰
く、石よりも介なり。日を終へず。貞しくして吉なりと。介なること石の如し。寧、日を終ふ
るを用ゐんや。斷なること識るべし。君子は、微をも知り、彰をも知り、柔をも知り、剛をも
知る。萬夫の望むところなり。」といひ、又、地雷復の卦の初九に就いては、「顔氏の子、其れ、
殆、庶幾からんか。不善有れば、未、嘗、知らずんばあらず。之を知れば、未、嘗、復行はさ
るなり。易に曰く、遠からずして復る。悔に祇ること無し。元吉なり。」といひ、又、山澤損の
卦の六三に就いては、「天地綱縵して、萬物化醇し、男女精を構せて、萬物化生す。易に曰く、

三人行くときは、則、一人を損し、一人行くときは、則、其の友を得と。致一(專一の義)なる
を言ふなり。」といひ、又、風雷益の卦の上九に就いては、「君子は、其の身を安んじて、而して
後に動き、其の心を易くして、而して後に語り、其の交を定めて、而して後に求む。君子は、此
の三者を脩む。故に、全きなり。危くして以て動くときは、則、民與せざるなり。懼れて以て
語るときは、則、民應ぜざるなり。交無くして而も求むるときは、則、民與へざるなり。之を
與ふること莫きときは、則、之を傷る者至る。易に曰く、之を益すこと莫し。或は之を撃つ。
心を立つること恒勿し。凶なり。」といひ、更に又、次の如きことも、孔子はいつてゐる。「乾坤
は其れ易の門か。乾は陽物にして、坤は陰物なり。陰陽、徳を合せて、剛柔、體有り。以て天
地の撰(事の意なり)を體し、以て神明の徳に通ず。其の名を稱すること、雜なれど越えず。於、
其の(種)類を稽ふるに、其れ、衰世の意か。其れ、易は、往を彰して、來を察し、顯を微にし
て、幽を闡にし、開きて名に當り、物を辨へ、言を正しくし、辭を斷ずるときは、則、備はる。
其の名を稱するや小にして、其の類を取るや大なり。其の旨は遠く、其の辭は文なり。其の言
は曲にして中り、其の事は肆りて而して隱る。貳に因つて以て民の行を濟ひ、以て失得の報

を明かにす。

易といふものが興つた時代は、一體、中古でもあらうか。又、易の作者は、一體、心に憂患を懐いてでもゐたのだらうか。この故に、反省熟慮して、以て憂患に對するの心得を説いてゐるのではないか。すなはち、履の卦の意味する禮儀は、善行の基礎であり、謙の卦の意味する謙遜は、善事善行の柄にあたり、復の卦の意味するところは、所謂一陽來復で、あらゆる道德的行爲の本であり、恒の卦を説いては、善行の常恒持久の必要をいましめ、損の卦には、徳性を毀損するが如きことを掃蕩することが、徳行を脩むる所以であることを訓へ、益の卦に就いては、善事善行を増加することは、徳性の餘裕をつけることを説き、困の卦に關しては、困難に處するといふことは、道德性を辨別明識する所以であることをいひ、井の卦を以てしては、おのれの態度を變更せずして、人を養ひ、物を利すべきであつて、すなはち、道德の素地を述べ、巽の卦をあげては、道に巽たがふことは、善行をして、それに規範あらしむることであるといふことを知らしめんとするものである。而して、復すなはち禮に到達する方法は、和といふことであり、謙遜といふことは尊くして光があり、復すなはち善にかへるには、善の端緒の微小な

るうちに於てすべきであり、恒といふことは、如何に煩雜なる事に處してもいとはずに、つねに、よくみづから守るところを一にすることに依つて得らるるものであり、又、過を抑損することは容易なことではないので、それに就いては、まづ困難なる、過失の抑損といふことをなした上で、然る後安樂を取るべきものであり、おのれの徳性を増して裕かにすることにのみ努力して、あへて限度を設けないとふことが、益の益たる所以であり、又、窮して然る後通ずることが、困の困たる所以であり、井といふのは、何處に行くとしても、善に安んじて變ぜざるべきをいひ、巽は、時の不可なるを稱はかりては隱遁すべきことをいふ。更に又、履すなはち禮は、行を和する所以であり、謙は、禮に節度あらしむる所以であり、復は、自己反省に依つて自覺する所以であり、恒は、徳を一にしてかはらざる所以であり、損は、以て過を抑損して、害に遠ざかる所以であり、益は、善をまして利を興す所以であり、困は、天命を自覺して、自己の分に安んずることに依つて懇を少くする所以であり、井は、施しに私念なくして以て義を辨ずる所以であり、巽はあらゆる言行に見はからひをつくる所以である。以上述ぶるが如く、九卦の意味するが如き、徳と、才と、および、それを實現する方法とを三省して、事に處すべきで

ある。

易の書といふものは、何れの方面からしても、遠ざくべきものではない。而して、その道はしばし變遷推移して、しばらくも停止することなく、六位の間に周流して、或は上り、或は下りして上下常なく、陰陽柔剛交々相かはるもので、固定的の常典となすべきものではなくして、ただただ變化して適くところのまゝである。而も、その出入往來には、一定の法度があつて、外内兩卦ともに人をして懼るべであることを知らしむるものである。又、憂患とその來由とを闡明にし、大師大保の嚴格さはないにしても、父母の如き親しみを以て臨んでくれるものである。初當は、易の經文に率由して、實行の方法を揆度して行けば、後には、その間に、不易の常典あることを明識するに至るものであるが故に、遂には、苟も、その人によらなければ、道は虚しく行はれないやうになるものである。

易の書を見れば、どの卦に就いても同様に、卦の初たる初爻からはじめて、次第に、卦の終たる上爻までその内容を闡明することによつて一卦全體の本質を知るものである。故に、六爻に就いては、陰陽互に相雜はりて、而も、だた、これ、その時の事物に比喻をとるものである。

而して、初爻に於ては、事微にして知り難く、上爻に於ては、事著しくして知り易きは、初爻は本で、上爻は末だからである。この意味に於て、初爻の辭は、これかあれかと思ひはかつて讀む中に、上爻の辭に至れば、卦の極、事の終で、ここに至つて、判然として來るのである。然り而して、その時宜相當の物をまじへ擧げ、徳を具へ、是非を辨別するのは、二爻より四爻に至るまでの中爻でなければ備はらないのである。かくて、吉凶存亡を要約してゐることは、居ながらにして知ることが出来る次第である。故に、知者にして、もしも、象辭を讀んだならば、卦全體に對する半以上の見當はつくであらう。而して、二爻と四爻とは、ともに陰位であつて、大體に於て同様の事を意味する。例へば、賢人たる事に於ては同一であるが、二爻が民間の賢人に當るのに對して、四爻は君側の大臣にあたるを以て、當然その位を異にするものである。故に、善事を行ふことに就いても、おのづからして薄厚がなければならぬし、その結果、二爻の賢人が、民間に於て名譽を博するにとどまるのに反して、四爻の賢人は、君王に近いために、畏れのみ多い次第である。およそ柔の履むべき道は、陽剛から遠ざかつてはよろしくないのに六二が咎なきを得る所以は、それが、本來の性質たる柔中を用ゐるからである。三爻と五爻と

は、事を同じうして、位を異にするといふ點に於ては、二爻と四爻との如くであるか、三爻は危険の位地で、従つて、凶事が多いのに反して、五爻は、天子の地位で、従つて、功が多いわけである。すなはち、柔はあやふく、剛はたへるものであるためであらうか。

易の書は、まことに廣く、且、大なるもので、あらゆるものを具備してゐる。すなはち、天道のこともあれば、人道のこともあり、又、地道のこともある。而してそれ等の三才を通じて、おのおの二つづつあつて、上の二爻を天とし、中の二爻を人とし、更に、下の二爻を地とするので、一卦は六爻あるわけであるが、その六爻ある理由は、三才の道に因んだものであるといふ以外にはないのである。然るに、天地人ともに、その道には變動があるので、それに效つて、爻を設けた次第であるが、その爻にも、貴賤の差等があつて、而も、それは萬物のそれに象つたものであり、而して萬物は、剛柔相錯雜混淆して文彩を呈して居り、剛柔の文彩がその宜しきを失ふとき、その結果として凶吉が生ずるのである。

易が興つたのは、殷末の亂世に於て、周の文王が盛徳を以てして紂王のために羸里に囚はれた頃であるので、易の本文には、危ぶみ懼るることが多く見えてゐる。而して、危ふき者は、

それをして平かならしめ、易る者は、それをして傾かしめるものである。易道は甚大なるもので、萬物それによつて廢れず。懼れ戒しむることを以て、始終する結果は、遂に、何等の咎もないやうになるのは、易道の易道たる所以である。

一體、乾は、天下の至健なるものである。故に、それにならふところの人々の徳と行とは、恒に平易にして、そのため、將來の險難を豫測することが出来る。又、坤は、元來、天下の至順なるものである。故に、それにならふところの人々の徳と行とは、恒に、簡略にして、そのため、未來の阻難を察知することが出来るのである。故に、乾坤の卦を學んで、その易と簡とを心に悦んで、よくそれを研鑽考慮して、天下の吉凶を定め、天下の事に孜孜として努力することとなる。この故に、易の變化によつて、言行をなすとき、その吉事には、吉祥がある。又、易の象るところの事によつて、器物を造るべきであることを知り、易の占によつて、未來を豫知することが出来るのである。聖人は、天地が設けたところの位に居つて、天地の意を體して八卦を作り、これを人事に就いて考察し、これを陰陽變化の本質に鑑みて作つたので、天下の萬民は、ことごとく、聖人の才能に與かることが出来る次第である。而して、八卦は卦象を

以て人に告げ、爻象の辭は、眞情を以て言ひ、陰陽柔剛雜居して、その間に必然の結果として吉凶があらはれて來る。而も易の變動は、かならずや、結果が利である方面に向つて行はれ、吉凶は誠信の有無に依つて、その反對の結果を齎することとなる。この故に、愛惡の情があらはれて吉凶が生じて來るし、遠き應と近き比との當否によつて、悔吝は生じ、眞情か虚偽かによつて、利害が生じて來る。すべて、易といふものは人情に近くして、互に相得ざるときは凶で、或は、それを害するときは、悔にして、且、吝となるものである。對に叛かんとする者は、おのづからにしてその出すことばに慙ぢらひが見えるし、中心に疑ふところがある者は、その口にすることばは、兩岐ふたまたになるし、吉人のことばは、寡いけれども、躁人のことばは自然と多くなる。而して又、善を誣いつはりひるものは、無實にしてそのことばに落つきがなく、その守るところを失ふ人のことばは、おのづからにして屈するものである。

現代
語譯

周

易

高森良人譯著

三

三

三

三

三

三

三

三

三

三

上經

☰ 乾下 (乾爲天)

乾は元おほいに亨とほる。貞ただしきに利よろし。

乾の氣は、あらゆる事物事象の根源をなすものであつて、時空間を超越してその存在を見る。故に、何物を以てするも、その達成亨通を妨害することは出来ぬ。さりながら、乾の氣も、それが貞正を得るに於てはじめてその本性を發揮して有終の美をなすものである。

初九。潜龍なり。用ゐる勿れ。

初九は、地中に潜藏するところ龍の象であつて、人に於ては、聖賢に當る。この意味に於て、かかる時に在りては、如何なる賢徳を備へてゐるところの聖人といへども、それをも、直に實施するやうなことをしないで、しばらく韜晦して時の到るを待つべきである。

九二。見龍田けんりゅうでんに在り。大人を見るに利し。

地中に潜藏せる龍も、この時やうやく地上すなはち田に見はれて見龍となる。これを人倫關係に就いて考へるならば、九二は、剛健中正の徳をそなへたところの大人君子に相當するの

で、天下の人々は、この聖徳ある大人の出現によつて、その徳澤に浴すべきである。

九三。君子終日乾乾けんけんとして夕ゆふべに惕てき若やくたり。厲あやけれども咎とが无なし。

爻の地位よりすれば、内卦の極にして中を得ないけれども、陽爻を以て陽の位に居る。而して下卦の極、上卦の下で上下ともに險惡の地位である。人に於ても同様で、君子は終日乾乾として匪勉努力寸時たりとも倦怠することなきのみならず夕刻に至つてみづから恐懼反省することを忘れなければ、たとひその地位は危険であつても、咎責を免るることを得るものである。

九四。躍まどらんか或まどひて淵まどに存り。咎とが无なし。

九四の爻は、下體より上體に移るところの乾道一變の時である。かくて、地上まで出て來たところの龍は、直に飛躍しようかとも思ひながら、なほ疑懼して決しないかたちである。人に於ては、公卿の位にあたり、九五の王位に進まんとして進むこと能はざるものである。かくの如く、その進退舉止、その宜しきに從へば、咎なきを得るわけである。

九五。飛龍天に在り。大人を見るに利し。

龍いよいよ飛躍して天に在るが如く、聖徳ある大人が、いよいよその志を得て天子となり、剛健にして而も中庸を得たる徳を以て、天下萬民の安寧幸福をはかるので、下人民はかくの如き聖君を戴いたことを有難く思うて仰ぎ見て互に隨喜すべきである。

上九。亢龍悔有り。

龍がいよいよ飛んでつひにその極を窮むるのはこれ進むことを知りて退くことを知らぬもので後悔を噛む次第である。

用九。群龍を見るに首无し。吉なり。

もし乾卦六爻が皆變じて坤となる時は、例へば、乾の初九より上九までの六爻すなはち六疋の龍が皆それぞれその威を逞しうしてゐたのが、急變して柔順となるのは、見るからに恐しき頭を藏したかのやうであつて、人も柔順の徳を身に備へて、固く自己を守るときは、首を得ることとなる。(乾の卦が坤の卦に變つた場合にはこの用九を以て吉凶悔吝を判斷するものである。)

象に曰く、大なる哉乾元。萬物資りて始む。乃ち天を統ぶ。雲行き雨施して品物

形を流く。大いに終始を明かにし、六位時に成る。時に六龍に乗じて以て天を御す。乾道變化して各々性命を正しくす。大和を保合して乃ほ利貞なり。首として庶物に出で萬國咸寧し。

ここにいふ象に曰く云々の辭は、謂所十翼の一つであるところの象傳である。さて、乾元の一氣は、誠に偉大なる作用を有するもので、萬物もこの氣によつてはじめて生ずるものである。しかも、天道の全體を通じて、この氣の統率を受けてゐる。かくて雲となり、雨となり、萬物おのおの形を成し、また大いに天道の終始を明かにし、始には潛伏し、終には飛躍して、もつばら時の宜しきに從はんとするものである。乾徳ある者は、時に六龍即六爻の陽氣に乗つて天を統御するものである。そもそも乾道なるものは、萬物をして漸次變化せしむるものであるが、さりとて千種萬態の天下の諸物をして、名々天稟の性命をば、正しくそのまゝに實現發展せしむることに依つて、極度までによく調和してゐるところの氣を保全する時は、ここにはじめて利貞を得るものである。王者も、この乾道に則りて、天下に君臨すれば、萬國ごとく康寧を得るものである。

象に曰く、天行は健なり。君子は以て自彊して息まず。

かくの如く、乾卦の象たる天の運行が、寸時も休止することなく、まことに健そのものであるに鑑みて、君子は、よく自彊して息まぬものである。

(小象に曰く)潜龍なり。用ゐる勿れとは、陽下に在ればなり。見龍田に在りとは、徳の施普きなり。終日乾乾たりとは、道を反復するなり。躍らんかと或ひて淵に在りとは、進みて咎无きなり。飛龍天に在りとは大人のみ造すなり。亢龍悔有りと、盈つれば久しかる可からざるなり。用九は、天徳は首たる可からざるなり。潜龍々々といふのは、初爻は陽爻であつて、下にあつて、陽氣がまだ微弱であるので、現實に施さない方がよいといふわけである。次に、見龍云々といふのは、潜龍が地上にあらはれ出たやうに、聖人が世に現はれて、その徳化が普及されることをいふ。又、終日乾乾云々といふのは、正道を反復履行ふことであり、最後の用九云々といふのは、天の徳は、元來剛健であるのだからして、その上にも剛健を重ねて、人の首となつてはよくない。和柔の徳を以て、下に接すべきものであるからである。

文言に曰く、

乾の四徳なる元亨利貞の中の元は萬物の根源なれば、天地の徳に於ては、その第一となす。故に、また、あらゆる善の長たる所以である。亨は萬物を生じ、且、その性能を發揮せしむることによつて、萬物ことごとく嘉美を呈する。故に、あらゆる美のあつまりといふことが出来る。利は、物を生じておのおのをしてその性能を遂げしむるが故に、萬物皆その宜しきを得て、互に妨害することなければ、これを義の和といふべく、貞は萬物をして成就充足せしむるが故に、あらゆる事の根幹と稱すべきである。かくの如く、君子たる人は、よく仁を體得して、萬物を包容するが故に、ここに人に長たるべく、又、萬物をして美を發揮せしむることは、禮に合するに足るべく、萬物をしてその宜しきを得しむることは、美に合するに足るべく、よく貞固にして、萬物をして成就せしむるが故に、これを事の幹となすに足るが如く、君子は、以上の四徳を兼ね者ふ者なれば、乾は元亨利貞といふのである。

初九に、潜龍用ゐる勿れとは、如何なる意味であるかといふに、「それは陽氣甚だ微弱にして施用するに不都合だからである」。孔子はいふ。もし、これを人に就いて考へれば、龍徳を有

すれども、あへて潜伏するものである。そもそも聖賢の士が世に處するには、ひたすらその道を固守することに急にして、世俗と浮沈せんが爲に、その節操を易へるやうなことは斷じてしないし、又、名聞を世に博するが如きことをなさずして、世を遷れて何等の煩悶もなく、汚辱の世に容れられずして、自己の言行を非とせられても、何等の悶ともなさず、楽しむ時は行ひ、憂ふる時は去るが如く、確乎として抜くべからざるものは潜龍の徳である。

九二に見龍田に在りとは如何なる意味であるか。孔子はいふ。聖賢たるの徳ありて、正中なる者である。自己の日常の言行を信實謹慎にせんことを努め、邪惡を防止して、もつばら誠を存し、世のために善事をなしても、その功を誇らうともせぬ。この徳の施し博くして、移風易俗を將來するものである。易に見龍田に在り。大人を見るに利しとは、君徳の人を指していふのである。

九三に、君子は終日乾乾として、夕に惕若たり。厲けれども咎無しとは、如何なる意味であるか。孔子はいふ。君子は徳に進み、業を脩め、世の爲に事を爲さんことを欲する者である。然るに、忠信は徳に進む所以であり、外文辭を修飾し、内誠實を確立することは、業成りて

それに居守する所以である。時節の到來するを知つては、斷々乎として進み至るものなれば、與に事の幾微を談するに足るべく、又、時いまだ可ならざるを自覺しては、よく隱退して事の宜きを失はざるものなれば、相與によく義を存すべきである。かくて、上位に居て驕ることなく、下位に在りて憂へず、常に乾乾として怠らず、その時に順つてよく戒慎するが故に危きに處して咎責を免かるるものである。

九四に、躍らんかと思ひて淵に在り、咎無し。とは如何なる意味であるか。孔子はいふ。或は上らんかと思ひ、或は下つてらんかとも思つて、定位を見ないけれども、さりとして、決して、邪惡を敢てするわけでもなく、又、進退去就一定しないが、さればといつて、群類を離れて勝手に行動するのでもない。君子は、自己の徳を修め、業を成すにも、もつばら機宜に従はんとするが故に、咎責を招致することはないのである。

九五に、飛龍天に在り。大人を見るに利しとは如何なる意味であるか。孔子はいふ。同聲は相應じ、同氣は相求め、水は濕に向つて流れ、火は燥に就いて燃え、雲は龍に従つてあらはれ、風は虎に従つておこる。聖徳の君子が、天子の位に在る時は、萬民ことごとく仰ぎ觀る。

すべて、天に本づく動物は、上を親しんで天運になぞらへ、地に本づくものは、下を親しんで大地の靜固なるが如くし、いづれも皆、その類に従ふものである。

上九に、亢龍悔あり。といふのは如何なる意味であるか。孔子はいふ。上九は、貴を極むるとはいへ、天位を有するわけではなくて、無位のものである。而も、下卦には應すべき陰爻なきが如く、何等賢人の輔翼もないのであつて、これみな、高きに過ぐるの罪で、この際、もし動いて事を爲さんと欲すれば、後悔臍を嚙むやうなことにもなるであらう。

潜龍用ゐる勿れとは初九は卦の最下位にして、陽氣潜藏するからであり、見龍田に在りとは、すでに地上にあらはれたとはいへ、いまだ事を爲すに足らず、天下その文明を仰ぐをいひ、終日乾乾とは、時と借にいよいよ事を行ふことを意味し、躍らんかと或ひて淵に在りとは乾道革まるを以て、みづから試みるをいひ、飛龍天に在りとは、天徳に位するが故に、上に居て下を治むるをいひ、亢龍悔有りとは、時と借に極まりて過去の災を招致するをいひ、乾元用九とは、よく天則を見て、剛にして而もよく柔の徳を以て君臨するが故に、天下よく治まるをいふのである。

そもそも、君子たる者は、成徳を以て行爲し、日日それを發揮すべきものである。然るに、初九の如きは、徳すでに成れども、隠れていまだ見はれざる爲に、誰人もこれを知らず、又行ひいまだ成らざるを以て、君子は爲ないのである。次に、九二は如何といふに、君子は、學んで聚め、問うて辨へ、寛に居り、仁を以て行ふ者なれば、いまだ人君の位には居ずといへども、すでに君たるの徳を具へたところの人である。然るに、九三は内外兩卦の乾と乾と相接するところの、いはゆる重剛にして而も中ならず、上は九五の天に在らず、下は九二の田に在らざるが故に、常に恐懼反省することに依つて、危殆の咎責より免かれ得べく、九四も同様に、重剛にして而も中ならずして、天地人の何れにもあたらぬ。故に、疑惑して慎重の態度をとるので無難である。然るに、九五の大人となれば、天地とその徳を合せて、よく萬民を包容し、日月とその明を合せて、萬民を照明にし、四時とその序を合せて、機宜を失せず、神鬼とその吉凶を合せて、善に與し、惡を斥け天に先つて、天たがはず、天に後れて天の時を奉ずるといふ風に、天人合一の境地に在るを以て、萬民の翹望する所以である。然るに、一度進むことを知つて退くことを知らず、存することを知つて亡ふことを知らず、

得ることを知つて喪ふことを知らぬ。而して事を爲して、常にその正當を得る者は、ただ聖人ばかりである。

三三三 坤上 (坤爲地)

坤は元いに亨る。牝馬ひんばの貞ていに利し。君子往く攸とくろあり、先つときは迷ひ、後るときは主を得。西南には朋ともを得るに、東北には朋を喪ふに、利し。貞に、安んずれば吉なり。

坤は、乾に順ひ、乾を承けて達成せしむるもので、乾と同様に、時空間を超越して亨通するものである。さりながら、それは、ただ、牡馬に對する牝馬の柔順なるが如き場合に於てのみ、さうである。この意味に於て、君子たる者が、もし往いて事を爲さんとする場合、積極的に、みづから先つて首唱者となる時は、圖らざる迷惑に遭遇するけれども、消極退嬰的態度に出づるときは、主を得て大過なきを得るものである。西南即坤の方に行けば、おのれの朋たるべき女を得て協力して乾を佐くるのは申すまでもなく、東北即艮の方に向ふ時は、朋たるべき女を喪ふことになるけれども、この時もなほ乾に順ふことになれば、所謂牝馬の貞にして、吉を得るものである。

象に曰く、至れる哉坤元、萬物資りて生ず。乃天を順承す。坤は厚くして物を載す。徳は無疆に合ふ。含弘光大にして品物咸亨る。牝馬は地類にして地を行くと疆り無し。柔順利貞は君子の行く攸なり。先つときは迷ひて道を失ひ、後るときは順にして常を得。西南には朋を得るは乃類と行く。東北には朋を喪ふは乃終に慶有り。安貞の吉は地の無疆に應ず。

坤元は至れり極まれるものであつて、乾元の氣を順承して、萬物も坤元によつて生ずるものである。而して、坤は至厚にして萬物を載すること限りなく、無疆なる乾徳に合して、またよく萬物を包容し、あらゆる物をして、各々その性能を遂げしめる。且又、牝馬は地の類にして、よく柔順なれども、地を行くこと疆りなきものである。されど、何れの場合といへども、柔順貞正なる時に於てのみ可である。人に於て、君子たる者の言行も、先んじ迷うて、道を失ふが如きことなく、常に後れて順にして當を得ることに留意すべきであり、又、みづから陰にして西南の坤に至ることは、同類と共に陽に順ふことであり、みづから陰にして東北の

陽に向ふことは、初は群を離れ朋を喪ふけれども、結局は有終の美をなして慶びを招くものであつて、あらゆる場合に於て、真正に安んずることが、地の無疆なるに應じて吉を得る所以である。

象に曰く、地勢は坤なり。君子は以て厚德もて物を載す。

地の形勢には高下がある。而も地は至順にして且極めて博厚である。君子は、それに法つて萬人を包容する者である。

初六。霜を履みて堅氷至る。

陰の氣はじめて生じて、いまだ極めて微弱とはいへ、漸次増長すべき性質のものである。この意味に於て、霜を履んでは堅氷至ることを知つて、事を未然に防ぐべきである。

象に曰く、霜を履みて堅氷とは、陰始めて凝るなり。其の道を順致すれば、堅氷に至るなり。

陰の氣がはじめて凝り固まる時に於ては、また甚微かなものであるけれども、その道を順習して行くときは、次第に盛んになつて来て、遂には堅氷となつて来る。故に、はやくそれを

識別すべきである。

六二。直方大^{ちよくはうだい}。習はずして利しからざるは無し。

この一爻は、中正を得てゐるので、順直にして方正に、而も至大の形であつて、努力學習を待つまでもなく、よろしきものである。

象に曰く、六二の動は直にして以て方なり。習はずして利しからざるなきは、地道光^{おほ}いなるがためなり。

六三。章を含みて貞にす可し。或は王事に従ふも、成さんとする事無くして終り有れ。

自己の美點、例へば才能力量の如きものを内に蓄へて外に現はさず、時に出でて王事に盡すことがある場合に於ては、おのれの功を功とせずして、ひたすら有終の美を成さんことに努力すべきである。

象に曰く、章を含みて貞にす可しとは、時を以て發するなり。或は事に従ふもとは知、光大なり。

六四。囊を括る。咎も無く、譽も無し。

あだかも、囊の口を括つて開かざるが如く、おのれの功名を世に顯はさないやうに謹慎してゐさいすれば、咎もなく、譽もなくして、平穩無事なることが出来るであらう。

象に曰く、囊を括る。咎無しとは、慎めば害あらざるなり。

六五。黄裳^{くわうしやう}。元吉^{げんきつ}なり。

六五の位は、地の色たるところの黄色の裳を身に纏うて、地の天に對するが如き中順の徳を以て人君に事ふる時は、元いなる吉を得るものである。

象に曰く、黄裳。元吉とは、文^{あや}・中に在るなり。

上六。龍、野に戰ふ。其の血玄黄^{けんくわう}なり。

上六は、陰その極に達して、陽の如くなり、あだかも、二龍相戦ひ、共に傷つき、玄血と黄血とを流すが如く、臣にして君に抗し、子にして父と争うて血を見るに至る。

象に曰く、龍、野に戰ふとは、其の道窮まるなり。

用六。永貞^{えいて}に利し。

坤の封の六爻皆變する時は、その志も變り、永遠に真正にして柔順なればいい。

象に曰く、用六の永貞は、大を以て終りあり。

文言に曰く。

坤は至柔なれども、乾に應じて一たび動く時は、剛健なものである。而して、至靜なれども、また一定不變の徳を具備し、萬物をして、各々其の形をなさしめる。而も、乾に後れ順ふ時に於ては、主たる乾の力を得て、柔順の常を喪失することなし。かくして、坤は萬物を包容して、その徳化も亦従つて光大なものである。かくの如く、坤の道は、柔順にして天を承順して時宜に従つて行ふものである。

積善の家には、かならず餘慶があり、積不善の家には、かならず餘殃がある。臣にして、その君を弑し、子にして、その父を弑するが如き惡虐無道の行爲は、一朝一夕の故にあらずして、その來由するところも、漸進的の蓄積の結果である。すなはち、よくこれを辨へて、事を未然に防止しないためである。易に、霜を履んで堅冰至るといふのは、蓋、その道を順次にすすむるの結果をいふのである。

直といふは、心の正しきをいひ、方とは、事の宜しきをいふ。君子は、敬を以て内を直くし、義を以て外を方にする。敬義立つ時に於ては、徳は決して孤なるものにあらず。直方大、習はずして利しからざる无しとは、すでにこの徳あれば、行ふとして利しからざるなきを以て、何等の疑惑をも必要としないわけである。

六三の陰は、章美ありといへども、これを内に含んで現はさず、一たび王事に従ふことありとしても、美を君に歸して自己の美となさず、みづからは、あへて成功の名に居らぬ。かくて、坤は地道であり、妻道であり、臣道であが故に、乾の主唱を待つて、これに和し、乾に代つて有終の美を成さしむるものである。

天地交感して二氣變化すれば、草木繁茂し、これに反する時は、賢人隱遁すべきである。易に、囊を括れば、咎もなく譽もなし。といふのは、蓋、謹慎すべきを戒めたものである。六五の如きは、坤すなはち中色たるところの黄色の、而も外卦の中央にあるを以て、黄にして且中の徳を身に具して、自己の本分を盡することによつて、物の理に通曉するものである。かくて、正位にして臣たるの體を得、中に黄中の美德を充實せしめて、外四肢にあらはれ、

事業に發するのは、美の至りである。

それ自身陰でありながら、その勢窮まりて陽と紛らはしき程度になれば、遂に陽と戦ふに至るものである。上六の位に在りては、陽なきを疑はるくらゐなるが故に、龍、野に戦ふと稱する所以である。さりながら、陰は遂に陰にして勝つこと能はず、共に傷つくが故に、血と稱する。而して、玄黄といふのは、天地ともに傷ついて、天の玄血と地の黄血とか混淆する意味である。

☳☱ 震下 (水雷屯)

屯は元いに亨りて、貞しきに利し。往く攸有るに用ゐる勿れ。侯を建つるに利し。

屯は屯で、草が地上に出でんとして、障害の爲に、その根が曲つた形で、事態の困難を意味する。すなはち、内卦の震は☳で、陽氣はじめて萌せるもので、活動的であるが、坎は☵で、陽が陰の中に陥没せるもので、險難の象である。故に、屯の卦は、危険の中に活動するもので、時を得る場合にのみ大いに亨ることを得るものである。而もそれは、貞正の場合にのみよろしきものである。されば、かくの如き險難の場合に在りては、進取的な態度に出でて失敗を招致すべきではない。雷あり、雨ありで、天下不安の時であれば、諸侯を建てて安泰を得しむべきである。

象に曰く、屯は剛柔始めて交はりて難生ず。險中に動く。大いに亨りて貞し。雷雨の動満盈す。天造草昧、宜しく侯を建つべし。而して寧んせず。

屯の内卦は震で、それは剛柔即陰陽始めて交はるの形であるが、外卦は坎で、險難を意見す

る。而も、震が坎の下に在るを以て、險中に動くの形をなすものである。かくて、動いて亨通せんと欲して險難に遭遇して、みづから貞正を嚴守することによりて、初志を貫くものである。かくて、雷雨大いに起つて天地の間に盈満し、萬物各々その生を遂げ得る。かくの如く、天地開けて、いまだ雜然として草昧の時に於ては、かならず身をば寧んぜずして、よろしく諸侯を建てて、天下の康寧を招來せんことに專念なるべきである。

象に曰く、雲雷は屯なり。君子は以て經綸す。

いまだ雨降らずして雲おこり、雷生じて屯難の象がある。君子は、よろしく、よく經綸を施して、この屯難を救済すべきである。

初九。磐桓す。貞に居るに貞し。建ちて侯たるに利し。

初九は、陽を以て下位に居る。才あれども用ゐるべき時にあらず、故に、磐桓して進まぬ。よろしく、貞正に處すべきである。この時に於ては、陽を以て衆陰の下に處るを以て、民心の歸嚮する所なれば、みづから立つて諸侯となるによろしきものである。

象に曰く、磐桓すと雖、志、正を行ふなり。貴を以て賤に下る。大いに民を得る

なり。

時至らずして進むべからずとするも、その志すところは、貞正を行ふに在る。陽の貴きを以て、而も陰の賤しきによつて、大いに民心を得るものである。

六二。屯如、道如たり。馬に乗りて班如たり。寇するに匪す。婚媾せんとす。女子、貞にして字せず。十年にして乃字す。

六二の爻は、九五に従はうと思ふけれども、行き悩み祗回してその意を決し得ない。いよいよ意を決して乗つて出かけようとしても、班旋して進まぬ。それは、初九が、六二に逼つて寇をなさないうまでも、切りと結婚を要求するからである。もし、この際、六二にして不貞の女であつたならば、正應なる九五を忘れて、初九に従ふであらうけれども、さすがに六二には中正の徳があつて貞節であるために、字して許嫁するが如き態度には斷じて出でないのである。かくして、隱忍する間に、屯難の時代が去るに及んで、はじめて初志を貫くものである。象に曰く、六二の難は剛に乗ればなり。十年にして乃字すとは、常に反るなり。

六二が屯難に遭遇するのは、初九の剛に乗つてゐるからである。然るに、十年すなはち數が

窮まると變じて常道に復るので、ここにはじめて字して許嫁するわけである。

六三。鹿に即くに虞無くして、惟林中に入る。君子は幾をみて舍むに如かず。往けば吝なり。

鹿を見出せば、虞人即山澤を司る役人の案内をも俟たずして、ただ、鹿を逐ふことにのみ急にして、ひたすら林中に深くはいりて、遂には鹿を獲ざるのみか、己は林中に迷うて困しむものである。要するに、君子たる者は、よろしく事の機微に就いて、細心の注意を拂うて、時と處とを得ざる場合は、はやく止めた方がいい。さもなければ、結局は鄙吝の辱を蒙ることになるものである。

象に曰く、鹿に即くに虞無しとは、禽に従ふを以てなり。君子は、之を舍む。行けば吝なりとは、窮するなり。

六四。馬に乗りて班如たり。婚媾を求めて往けば、吉にして、利しからざる無し。馬に乗つて初九の剛に就かんと欲すれども、六二すでに初九と親しめるかと疑うて、躊躇遂巡する。さりながら、六二たるもの、中正貞固にして、初九に従ふものではないので、往い

て婚媾を要求すれば、その意を果すことが出来るものである。即、吉にしてよろしからざるなきわけである。これを、若し君臣の場合に就いて考へるならば、六四は陰柔にして九五の君位に近くして、君の信任を厚うしてゐながら、屯難のこの際、自己の才能を以てしては、到底濟ふことは不可能である。故に、進んで局難に處せんとして、敢て意を決しないが、この場合、賢良をもとめ、輔佐として、大いに自重努力すれば、その意を果すことが出来るわけである。

象に曰く、求めて行くは明なり。

自己の才能の不足を自覺して、往いて賢者を求め、おのが輔佐となすのは、明德の人といふべきである。

九五。其の膏を屯す。小貞には吉なれども、大貞には凶なり。

九五の德澤いまだ萬民に普及してゐないのみか、權勢はもつばら初九に歸してゐるので、屯難のこの際に於て、九五のとるべき態度といふものは、小事を正して吉を得るにあつて、大事を正さんとして凶を招來するが如きことは不可である。

象に曰く、其の膏を屯すとは、施すると未光いまだおほいならざればなり。

上六。馬に乗りて班如たり。泣血、漣如たり。

上六の如きは、居りて不安なるのみならず、さればといつて、動いて行く所もないので、よ
しや馬に乗つて進まうとして見ても、また馬をかへさざるを得ない。されば、常に泣血漣如
として絶ゆる間もないわけである。

象に曰く、泣血漣如たり。何ぞ長かるべけんや。

かくては、その運命も到底長きを保しがたい事情に在るのである。

☶☵ 艮上 (山水蒙)

蒙は亨る。我、童蒙に求むるに匪ちがず。童蒙、我に求むるなり。初筮には告ぐ。再三
すれば瀆けがる。瀆るれば則すなはち告げず。貞しきに利し。

艮即山の下に坎即水があるのは、初めはその流れを止めらるるけれども、何時かはつひに流
れ去るが如く、人も生れて蒙昧であつても、學問によつて道を知るものである。これ、蒙は
亨るといふ所以である。而して、この卦に於ては、九二が剛中の徳を以て、六五の童蒙を教
育するを意味する。然るに、師弟の道たるものは、師がみづから行つて教ふべきものではな
くして、子弟の方から來つて教を乞ふべきものである。しかも、それは、身分の高下を問は
ぬ。この意味に於て筮する場合も同様で、誠意を以て占へば、神のお告げを受けることが出
來るけれども、その教へを受けながらも、尙且疑惑して再三質問するのは、その人に誠意が
なくて神明を冒瀆する證據で神明もつひに告げないわけである。かくの如く、ただ真正なれば
よろしいわけである。

象に曰く、蒙は山下に險あるなり。險にして止まるは蒙なり。蒙は亨るとは、亨を以て行ひ、時に中するなり。我、童蒙に、求むるに匪ず、童蒙我に求むとは、志應するなり。初筮には告ぐとは、剛中を以てするなり。再三すれば瀆れ、瀆れば則告げずとは、蒙を瀆すなり。蒙の以て正を養ふは、聖の功なり。

象に曰く、山下に出づる泉あるは、蒙なり。君子は以て行を果さしめ、徳を育はしむ。

初六。蒙を發く。用て人を刑するに利し。用て桎梏を説き、以て往くは吝なり。

無知蒙昧を啓發するには、まづ刑罰の長るべきものであることを知らしむるを要する。これに反して、桎梏を解いて、いたづらに寛容を以てその主義とすれば、民衆はそれになれて、遂に蒙を發くことを知らずしてをばる。これ鄙吝たる所以である。

象に曰く、用て人を刑するに利しとは、以て法を正しうするなり。

刑罰は法を正しうする所以であるので、それに依つて過を改めさせようとする爲である。

九二。蒙を包ぬ。吉なり。婦を容る。吉なり。子、家に克くす。

九二は卦主で、蒙昧を啓發する人、初六・六三・六四・六五の四陰を包容して、それ等を兼ねてひとしく啓發し、而も九二と正應するところの六五即婦を納れて吉なるものである。然るに又、九二はその位よりすれば、臣であり、子であるといふ意味において、みづから家事に任じてよく治むといふわけである。

象に曰く、子家を克くすとは、剛柔接すればなり。

子が家を克くすといふのは、九二の剛と九五の柔とよく相應じ相接合するためである。

六三。用て女を取る勿れ。金夫を見ては躬を有たず。利しき攸无し。

この爻は、上九に六三を娶らぬやうに誠めるものである。すなはち、六三の女は貞節を保ち得ずして、みづから進んで上九の金夫に見えんとするもので非禮の活動であるからである。象に曰く、用て女を取る勿れとは、行ひ順ならざればなり。

六四。蒙に困しむ。吝なり。

この爻は、九二の陽にも遠かり、六三・六五兩陰の中に處つて、何等正應するものもないの

で、蒙昧に困しむのも當然のことで、吝と稱する所以である。

象に曰く、蒙に困しむの吝は、獨、實に遠かればなり。

實といふのは、虚に對することで、陽にあたる。

六五。童蒙、吉なり。

六五の爻は童蒙にあたる。その陰なる點に於て、順であり、外卦の中にして第五爻の尊位に居つて、九二と相應するなど、何れの點よりしても吉でめる。

象に曰く、童蒙の吉は順以て巽なればなり。

柔順にして卑巽であるからである。

上九。蒙を撃つ。寇を爲すには利しからず。寇を禦ぐには利し。

上九は、剛の極で、衆蒙を撃つものである。故に、内部に對つて猛を以て治めようとするよりも、却つて外部に對つて衆蒙の寇仇たる諸種の誘惑を防止するに努力すべきである。

象に曰く、用て寇を禦ぐに利しとは、上下順なればなり。

用て寇を禦ぐに利しとは上の願望と下の希望と兩々相俟つて順調に進まんとするからである

三三 乾下 坎上 (水天需)

需には孚あるべし。光いに亨る。貞にして吉なり。大川を渉るに利し。

乾下坎上、即、水であり雲であるところの坎が、天即乾に上るといふことは、蒸潤の象でもあり、又乾剛進まんと欲して前に坎險あるに遭ひ、時を待つて進むの象でもある。而して、この卦主たる九五は、剛健中正にして、中に誠信の徳を具備するが故に萬事大いに亨通して貞正を得て吉である。かくて、時を待つて進む時は、よしや大川を渉るの危険を冒すとしても差支ないものである。

象に曰く、需は須つなり。險前に在り。剛健にして而も陥らず。其の義困窮せず。

需には孚あるべし。光いに亨る。貞正にして吉なりとは、天位に位して、以て正中なればなり。大川を渉るに利しとは、往いて功あるなり。

象に曰く、雲、天に上るは需なり。君子は以て飲食宴樂す。

雲が天に上つてまだ雨とならずに、陰陽和合の時を待つやうに、君子も飲食宴樂して、ひた

すらすその心身を養ひ、施すべき時の至るを待つべきである。

初九。郊に需つ恒を用ゐるに利し。咎無し。

初九は野外に待つて、萬事その常態を確保することによつて咎なきを得るものである。

象に曰く、郊に需つとは、難を犯して行かざるなり。恒を用ゐるに利し。咎無しとは、未だ常を失はざればなり。

九二。沙すなに需つ。小しく言あり。終には吉なり。

この爻は坎即水邊近くの沙原に待つものであつて、多少の批難を免かれぬ。さりながら、陽剛の才を有しながら、よく柔位に在りて、中を守れば、終には吉を得るものである。

象に曰く、沙に需つとは、術たぐひにして中に在るなり。小しく言ありと雖、言を以て終るなり。

この爻は、陰柔の位なるが故に、寛裕を意味し、内卦の中なるが故に、中に在るといふ。かくして、沙原に待つは、多少の批難ありとするも、終には吉を得るものである。

九三。泥に需つ。寇の至るを致す。

泥に待つのは、九二の沙に待つよりすれば、益々水の難に接近するものである。而も、剛にして中ならず、乾の最上位に位して、進取の象を有するが故に、寇難を招致するものである。象に曰く、泥に需つとは災外ほかに在るなり。我より寇を致す。敬慎すれば敗れざるなり。

九三の上には、外卦の險難が控へてゐる。而も、九三みづからその難を招致せんとするものである。さりながら、この際、敬慎を宗として時宜を待つて進めば、失敗を免るるものである。

六四。血に需つ。穴より出づ。

六四の爻は、それみづからは陰柔にして、而もその下に於ける三陽の迫害を蒙つて、遂には血を見るに至るものである。ただ、この場合、陰を以て柔位に居て、萬事よく自守すゝることに依つて、險難の穴を脱出することが出来る。

象に曰く、血に需つとは、順以て聽くなり。

血に需つすの難境に處しながら、従順の徳を身に備へて、萬事について逆はざるがために、難

穴を出づることが出来るわけである。

九五。酒食に需つ。貞にして吉なり。

九五の爻は、中正で、天子の位に居るが故に、萬事につけて、需つて得られないものはないので、みづから安んじて飲み且食ひて、時宜を待てば、貞正にして吉を得るわけである。

象に曰く、酒食に需ちて貞吉とは、中正を以てなり。

上六。穴に入る。速かざるの客三人來るあり。之を敬すれば吉なり。

この爻は、坎の極で、險難へ陥没の象を有する。かくて、險難の退去するを待つてゐた三陽は、この時ぞと思つて、打つれて進み來るものである。この時に於て、よくこの速かざる三人の客を敬すれば、終には吉を得るものである。

象に曰く、速かざる客來る。之を敬すれば終に吉なりとは、位に當らずと雖、未大失ならざればなり。

この爻は、陰にして而も險難の極に居るのは、位の當を得ないものである。さりながら、よく速かざる三人の來客を敬することは、大失ありとはいひ得られず。そのために、終には吉

を得る所以である。

☵☵ 坎下 (水天訟)

訟は孚あり。窒がればなり。惕れて中にすれば吉。終れば凶。大人を見るに利し。大川を渉るに利しからず。

訟の卦は、坎を下とし、乾を上とする。而して、乾と坎とは、本質的に相乖離するものである。それは、乾なる天は上行を以てその本性とし、坎なる水は下就を以てその本性とするからである。ここに於てか、兩者の間には争論なきを得ない。さりながら、およそ争訟は、自己に信實ありながら、その信實が相手によつて妨げられ、塞がれた場合に於てのみ正當である。断じて、妄りになすべきものではない。萬やむを得ざるがためである。さりながら、その争訟なるものも、みづから恐懼して、中道にしてやむれば吉を得れども、敢て遂行せんとすれば、如何なる場合といへども凶を招く。而して、おのれすでに訟へし場合に在りては、ひたすら中正の大人に依つて解決をもとむべきである。いたづらに初志を遂行せんとするものは、あだかも大川を渉るの危険なるが如く、みづから險難を招くものである。

象

象に曰く、訟は上は剛にして下は險なり。險と健とは訟ふ。訟には孚あるべし。窒がればなり。惕れて中にすれば吉とは、剛來りて中を得るなり。終れば凶とは、訟は成す可からざればなり。大人を見るに利しとは、中正を尙ぶなり。大川を渉るに利しからずとは、淵に入るべければなり。

惕れて中にすれば吉云々とは、訟の卦主たる九二は、内卦の中を得るもので、たとひ争訟を提起しても、中途にしてやむるの人、故に吉である。

象に曰く、天と水と違ひ行くは訟なり。君子は以て事を作すときには始めを謀るべし。

初六。事とする所を永うせざれば、小しく言あるも、終には吉なり。

初六は陰柔にして最下位に居るものなれば、その争訟を全うすること能はざるの人である。故に、訟事を永續しないやうにすれば、多少の紛争を免れぬとするも、終には吉を得るものである。

象に曰く、事とする所を永うせずとは、訟は長うす可からざるなり。小しく言あ

りと雖、其れ辯明すればなり。

九二。訟に克たず。歸りて通るれば。其の邑人三百戸皆無し。

卦主たる九二は、争訟を欲しても、相手は中正なる九五の尊位にある人で、到底克つことは出来ぬ。故に、己が邑に歸り通る次第である。かくして、争訟の再起を念とせざれば、その邑人三百戸に禍は來ないのである。

象に曰く、訟に克たず、歸りて通竄するなり。下より上を訟ふ。患の至ること擧ふが如くなればなり。

下位に居りて上位の人を訟へるといふことは、理に於て、すでに乖れるもので、かくては禍害を招致することも見易き道理だからである。

六三。舊徳を食んで貞しければ、厲けれども終には吉なり。或は王事に従ふも、成すこと无れ。

六三の爻は、陰柔にして九二と九四との兩陽剛の間に介在するものなれば、極めて險難に處するものではあるけれども、舊來の祿を食み、自己の分に安んずれば、終には吉を得る。王

事に従ふことがあつたとしても、みづからその功に居ないやうに心掛くべきである。

象に曰く、舊徳を食むとは、上に従へば吉なるなり。

九四。訟に克たず。復つて即き、渝へて貞に安んずれば吉なり。

この爻も、陽剛にして、而もその中を得ざるもので、争訟の象がある。九五と争訟を提起しようとしても、到底克つべき筈でもないのので、斷念して、かへつて天命に就いて健訟の態度を變へて、真正に安んずることに依つて吉を得る。

象に曰く、復つて命に即き、渝へて貞に安んずるとは、失せざればなり。

九五。訟をきく。元いに吉なり。

九五は卦主で、争訟を聽斷するの人である。而も中正の徳を以てする。元吉なる所以である。象に曰く、訟をきく。元いに吉とは、中正なるを以てなり。

上九。或は之に般革を錫ふも、終朝にして三たび之を褫はる。

上九は、陽剛を以て最上位に居り、訟へてよく勝つ者である。故に、革の大帶の賜さへ受けることもあるが、それも長く保ちがたく、一朝にして三たび褫奪せらるるものである。

象に曰く、訟を以て服を受くるも、亦敬するに足らざるなり。

三三三 坎下 坤上 (地水師)

師は貞なるべし。丈人じやうじんなれば、吉にして咎無し。

坎を下とし坤を上とする師の卦は、地中に水を有し、卦主たる九二の一陽が、他の衆陰を統帥する象であるが、軍師を興すことは、かならず貞正を以てすべきで、民衆の畏服尊崇するところの人であれば、吉にして咎なきを得るものである。

象に曰く、師は象なり。貞は正なり。能く象を以ひきるに正なれば、以て王たるべし。剛中にして而も應じ險を行ふも順なり。此を以て、天下を毒するも、而も民之に従ふ。吉なり。又何の咎かあらん。

卦主たる九二は、陽剛を以て坎卦の中を得るのみならず、六五の君主に相應じて、よしや險を冒すといへども、萬事順徳を以てするが故に、民衆これに従ふ次第である。

象に曰く、地中に水あるは師なり。君子は、以て民を容れ、衆を畜やしなふ。

坤下に坎あるは、地中に水ある所以である。君子は、これに則つて、よく民衆を包容し畜養

すべきものである。

初六。師出づるに律を以てす。否しからざられば、滅ぶきも凶なり。

出師のはじめに當つては、須らく紀律を宗とすべきである。然らざれば、假令勝を得ても、終には凶となる。

象に曰く、師出づるに律を以てすとは、律を失へば凶なればなり。

九二。師に在りて中す。吉にして咎無し。王三たび命を錫たまふ。

この爻は、陽剛にして内卦の中に居るのみならず、よく六五の人君に相順應して、その信任を厚うするものなれば、吉にして咎なき所以である。かくて、赫々たる功績に對しては、人君より一命には爵を受け、二命には服を受け、三命には車馬を受くるが如く、寵愛至らざるなき次第である。

象に曰く、師に在りて中す。吉なりとは、天寵を受くるなり。王三たび命を錫ふとは、萬邦を懐くるなり。

萬邦をも懐け服せしむるところの勳功を思ふべきであらう。

六三。師或は尸しかはねを輿こにす。凶なり。

六三は、中ならざる上に、正ならざるもので、その不明は、遂に、みづから一軍に將として出征して大敗を蒙り、累々たる戦没者の屍を輿こに載せて歸るのは、申すまでもなく凶である。象に曰く、師或は尸しかはねを輿こにすとは、大いに功咎無きなり。

六四。師左次さじす。咎無し。

この爻は、自己の天分才能を自覺して退きやど舍るために、軍師を完うすることが出来るのは咎なき所以である。

象に曰く、左次す。咎無しとは、未常いまだを失はざればなり。

六五。田てんに禽けん有り。言げんを執とるに利し。咎無し。長子は師を帥しる、弟子は尸しかはねを輿こにす。貞しけれども凶なり。

六五即軍師を興す人は、例へば禽獸が耕田を荒すを見るに忍びざるが如く、民衆國家の寇讐を掃蕩するを以て、唯一の理由とすべく、やむを得ずして辭を奉じて問罪の師を興すべきである。而も、この場合、軍師の率帥者には、九二の長子を以てすべく、もし然らずして、六

三の弟子をして、それに任せしむる時に於ては、輿尸の大敗を招くであらう。さすれば、よしんば軍師の名は正當なりとも、その結果は凶を免かれない次第である。

象に曰く、長子帥を師あるは、中行を以てなり。弟子尸を輿にするは、使ふこと不當なればなり。

中行とは、九二が内卦の中を得るをいひ、不當とは六三が不中不正なるをいふ。

上六。大君命すること有りて、國を開き、家を承く。小人には用ゐること勿れ。

この爻は、興師の成功のために、その勳功の多寡に應じて、人君の恩賞を辱うし、或は諸侯に封ぜられ、或は卿大夫となる。ただ、この際、小人は功を立てても、位を用ゐずして、單に物質的方面のものを以て行賞すべきである。

象に曰く、大君命すること有りとは、以て功を正すなり。小人には用ゐる勿れとは、必ず邦を亂せばなり。

二二三 坤下 (水地比)

比は吉なり。原ね筮して元いに永く貞しければ、咎無し。寧からざるも方に來る。後るるの夫は凶なり。

坎即水が、坤即地上に在るこの卦は、親比の象である。又、衆陰互に相親睦して、九五の陽に親附するの象でもある。然しながら、和親するにも、盲目的であつてはいけない。かならず親比すべき人を原ねたる上で、さらにそれを筮して決し、永久に真正を以て交はる時は、咎なきを得るわけで、かくて、今まで心やすくなかつた人さへも來り親しむこととなる。故に、この場合、上六の如く、一日たりとも後るる人は凶である。

象に曰く、比は吉なり。比は輔なり。下、順從するなり。原ね筮して元いに永く貞しければ咎無しとは、剛中を以てなり。寧からざるも方に來るとは、上下應ずればなり。後るるの夫は凶なりとは、其の道窮まればなり。

比とは、輔佐の意味で、下の群陰が、九五の陽剛に順從する意味である。親比すべき九五を

原ね筮して、その九五が陽剛中正にして、真正の人なるが故に、皆來り親しむわけである。然るに、上六の如く、ただひとり後れて來る者は、歸順の道を失して、窮するもので、凶なるわけである。

象に曰く、地上に水あるは比なり。先王は、以て萬國を建て、諸侯を親しめるなり。

先王が比の卦の象に則つて、よく統治した有様をいふ。

初六。孚有りて之に比しめば、咎無し。孚有りて缶に盈つるがごとくなれば、終に來りて它の吉あり。

親比の道は、誠信を以て宗とすべきである。而して、この誠信が、例へば、物が缶に充實するが如くで、決して中絶することがなけなれば、圖らざる他の吉を招くものである。

象に曰く、比の初六は、它的吉あるをいふなり。

六二。之に比しむこと内自りすれば、貞にして吉なり。

この爻は、内卦の中で、内心からよく九五に應じ親しむものである。故に、真正にして吉を

得る次第である。

象に曰く、之に比しむこと内自りすとは、自ら失はざればなり。

親比すべき正應を失はないことをいふ。

六三。之に比しむこと人に匪ず。

六三の爻は、陰にして陽位に居るのみならず、受くるところの四爻も、乗するところの二爻も、何れも皆、陰爻で、比しむところ、一つとしてその人を得ないのである。

象に曰く、之に比しむこと人に匪ず。亦傷ましからずや。

六四。外之に比しむ、貞にして吉なり。

六四の爻は、外卦の九五と比しむのは、その所を得たるもので、貞吉なる所以である。

象に曰く、外賢と比しむ、以て上に從ふなり。

賢君たる九五と比しむ、それに從ふわけである。

九五。比しむことを顯らかにす。王は用つて三驅して前禽を失ふ。邑人を誡めざれども、吉なり。

中正なる九五の人君は、公明正大の態度を以て、天下に比しむもので、獵を催す場合に於ても、包圍せず、三面攻撃にとどめて、禽獸を驅取り、禽獸の逃ぐるに任するが如くでも、つばら民衆をして歸嚮を自由ならしむるが故に、却つて邑人を誡むるまでもなく、感化するものである。

象に曰く、比しむことを顯らかにするの吉とは、位正中なればなり。逆ふものを捨て、順ふものを取れば、前禽を失ふ。邑人を誡めずとは、中ならしむればなり。上六。之に比しまんとして首無し。凶なり。

上六は、相親比するものなくして、人に後るるが故に遂に、凶となる。

象に曰く、之に比しまんとして首無しとは、終る所無ければなり。

その終を完うすること不可能なるをいふ。

☵☵ 巽上 (風水小畜) 天

小畜は亨る。密雲にして雨ふらず。我が西郊自りす。

巽を上とし、乾を下とするこの卦に於ては、小なる陰が、大なる陽を畜止する象である。而して、九二や九五の如きは、剛中を以て初志の貫徹に向つて邁進するが故に、遂にはよく亨通することをあらはしてゐる。然るに又、この卦に就いて、九三・六四及九五をとる時には坎で、雲若くは雨にあたり、尙又、九二・九三・及六四をとれば、免即西方をあらはすので西方よりその密雲が起つて、雨を降らさうと思つても畜止せられて、その意を果し得ないやうに、我すなはち周の文王が、西郊より起つて、いまだ君父の和合を缺くをいふのである。象に曰く、小畜は、柔、位を得て上下之に應ずるを小畜といふ。健にして巽なり。剛中にして志行はる。乃ち亨る。密雲雨ふらずとは、往くを尙ぶなり。我が西郊自りすとは、施し未だ行はれざるなり。

小畜とは、卦主たる六四が、陰柔を以て位を得て、上下の五陽がこれに相應することによつ

て畜止することをいふのである。而して、内卦は乾で、外卦は巽なれば、内心は剛健で、外に向つては巽順であり、加之、九二と九五との兩爻は、何れもは中で、初志の貫徹につとむるによつて亨通することが出来る。かくして、密雲が起つても、雨をなさないのは、陰陽の氣が相應しないために、陰氣は、ただ、それを欲するだけにとどまるを意味する。文王が、西郊から起りながら、その施しが普及しないために、志を遂行しがたい所以である。

象に曰く、風、天上を行くは小畜なり。君子は以て文徳を懿よくす。

下卦の乾即天の上に、上卦の巽即風があるけれども、陰のために抑止されて、その施しもまだ萬物に及ばない象である。君子は、これに鑑みて、文徳をよくすべきである。

初九。復すること道に自る。何ぞ其れ咎あらんや。吉なり。

この爻は、上行せんと欲しながら、六四に抑へられて、正道によつてかへるために何等の咎もなく、吉を得る次第である。

象に曰く、復すること道に自るとは、其義吉なればなり。

九二。牽きて復す。吉なり。

九二は、陽を以て陰の位に居るのみならず、中を得てはゐるが、上に相應すべきものがないので、他に同類をもとめて、相與に牽連して正道を以てかへりて、あへて妄進することをなさぬ。よつて吉を得るわけである。

象に曰く、牽きて復して中に在り。亦自ら失はざるなり。

九三。輿、輻を説く。夫妻反目す。

この爻も亦進まんとして欲しながら、六四に抑止せられて、あだたも輻即とこしほりを解かれた輿くるまの如く、進行を沮止せられてゐる。これは、また、九三の夫と、六四の妻とが、互に反目するが如く、萬事不都合なわけである。

象に曰く、夫妻反目すとは、室を正すこと能はざればなり。

九三の夫が、その室を正すこと能はざるによつて、夫婦の和合を得ないのである。

六四。孚有れば、血去り惕出でて咎無し。

六四は、この卦に於ける唯一の陰である。而も、衆陽を抑止するのだからして、宜しく内に誠信をそなふべきである。もし然らざる時には、衆陽のために傷害せらるることにもなるで

あらう。かくて、内に誠信をそなへて衆陽に接すれば、血を流すべき傷害とも遠かり、その危惧も免かれて、咎なきを得るであらう。

象に曰く、孚有れば惕出づとは、上、志を合はすればなり。

上即九五の信任を厚うすることが出来るからである。

九五。孚有りて摯如たり。富むに其鄰を以てすべし。

九五の人君は、六四の臣と共に誠信を以て志を合はせ、互に牽連し、その富も獨占せずして、臣下と相分つべきものである。

象に曰く、孚有りて摯如たりとは、獨富まざるなり。

上九。既に雨ふり、既に處るは、徳を尙びて載たせばなり。婦は貞しきも厲し。月望に幾し。君子往くときは凶なり。

上九に至つて、遂にやうやく雨となり、ここに定處するのは、みづから徳を尙び満すからである。婦人は、本來順なるべきものなれば、よしや正當なる場合といへども、剛を制するのは危険である。陰たる月も望に近づく時は、陽に拮抗する勢力を有するものであるが、君子

も自己の分に止まらずして、あへて進まんとすれば、凶を免かれないわけである。

象に曰く、既に雨ふり、既に處るとは、徳、積載すればなり。君子往くときは凶なりとは、疑ふ所あればなり。

陰の極盛は陽と紛らはしきほどで、すべて分に應すべきものである。

☰兌下 (天澤履)

虎の尾を履むも、人を啗はず。享る。

上に乾即天があり、下に兌即澤があるこの卦は、上下相呼應して、ますます分明に、人々その階級地位等に應じて、その當を得るの象で、それは、やがて、禮の根本であり、人の履むべき道である。然るに、これを更に他の方面より觀察すれば、上體の乾は、猛虎をあらはし、その上九は首を、九五は體を、九四は尾を示す。この猛虎の下にある兌は、その勢、尾を履まざるを得ぬ。然しながら、兌それ自身は、本來、和悦柔順の徳をそなふるもので、猛虎の激怒を蒙ることなく、その傷害を免かるるわけである。これ享るといふ所以である。

象に曰く、履は柔にして剛を履むなり。説びて乾に應ず。是を以て、虎の尾を履むも人を啗はず、享るゆるん。剛、中正にして帝位を履みて疚しからず。光明あり。

九五は、陽剛中正を以て帝位を履めるものであるが、常に正道を履行ふが故に、何等疚しき

こともなく、光明赫々たるものがある。

象に曰く、上天にして、下澤なるは履なり。君子は以て上下を辨じ、民の志を定めしむべきなり。

初九。素履す。往くときは咎無し。

履の卦の初めにある爻で、何等の飾も施さずして、虚心淡懐外物に累はさるることなくして往くときは、咎なきを得るであらう。

象に曰く、素履して之れ往くは、獨、願を行ふのみなり。

いまだ微賤にして位を得ないので、唯單に自己の願望を行ふにとどめて、敢て天下の事に任じないのである。

九二。道を履むこと坦坦たり。幽人は貞にして吉なり。

下卦の中を得て柔の位に居るこの爻は、常に、寛裕の態度を持するが故に、その履むところの道も、従つて、坦坦砥の如きものである。而して、上に應すべき爻もないので、自己の境遇を自覺して、幽人として貞正を守ることによつて、吉を得るものである。

象に曰く、幽人貞にして吉なるは、中自ら亂れざればなり。

六三。眇にして能く視、跛にして能く履むがごとし。虎の尾を履めば、人を啗ふ、凶なり。武人にして大君と爲るがごとし。

この爻は、下體の中を得るでもなく、又、それ自身陰でありながら陽の位に居つて、いたづらに心ばかり逸るために、あだかも眇者が物を視、跛者が履み歩くやうなもので、その眼界は狹隘に、その運少は遅々たるものである。かくて、自己の分際を自覺せずして、あへて猛虎の尾を履むとすれば、その結果は、推して知るべきであらう。これは、又、單に武斷の人でありながら、大君となるやうなもので、久しく位に居り得ないわけである。

象に曰く、眇にして能く視るとは、以て明ありとするに足らざるなり。跛能く履むとは、以て與に行くに足らざるなり。人を啗ふの凶は、位當らざればなり。武人にして大君と爲るがごとしとは、志剛なるのみなればなり。

九四。虎の尾を履む。愬愬たれば、終には吉なり。

愬愬として猛虎を畏懼するが故に、終には吉を得るわけである。

象に曰く、愬愬たれば、終には吉なりとは、志行はるるなり。

九五。夬して履む。貞しけれども厲し。

陽剛を以て尊位に得るこの爻は、決然として履行するもので、よしんば正位を得るものにもせよ、危険を免れない。

象に曰く、夬して履む。貞しけれども厲しとは、位正しくして當ればなり。

中正にして尊位に當るために、餘りに自負するからである。

上九。履を視て祥を考へ、其れ旋るときは、元いに吉なり。

履の卦の極にあるもので、過去に於ける履行のあとを熟視して、その祥徴如何を考察して、反旋即自己の省察を怠ることがなければ、大吉を得るのである。

象に曰く、元吉もて上に在るは、大いに慶あるなり。

三三 坤上 (地天泰)

泰は小往き大來る。吉にして亨る。

小なる陰の坤氣は上昇し、大なる陽の乾氣は下降してここに二氣の交感合して萬物を生成することを示すところの泰の卦は、人事に就いて考くて見ても。あらゆる人倫關係に於て、上下相互の意志の疏通をあらはすもので、天下安泰なること、疑ひなきもので、これ吉にして亨るといふ所以である。

象に曰く、泰は小往き大來る。吉にして亨る。則、是天地交はつて萬物通ずるなり。上下交りて其志同じきなり。内は陽にして、外は陰なり。内は健にして、外は順なり。内は君子にして、外は小人なり。君子の道は長じて、小人の道は消すればなり。

象に曰く、天地交るは泰なり。后は以て天地の道を財成し、天地の宜を輔相し、以て民を左右す。

二氣の交感合によつて萬物の生成發展を來す時に於ては、ややもすれば、すべてその度を超え、その節を失ひやすいもので、人君は、その傾向を牽制輔相して、民衆の性能を發揮せしむることに努力するものである。

初九。茅を抜くに茹たり。其の彙を以てす。往くは吉なり。

初九が天下泰平の際に於て、九二・九三の同類と志を合せて、相與に進まんと欲するのは、あだかも茅を抜く場合に、その根つづきをひとくめるにするやうである。而も、上には坤の卦がそれに順應してゐるので、往くは吉といふのである。

象に曰く、茅を抜くがごとく往くは吉なりとは、志外に在ればなり。

ただに初九のみならず、九二も九三もその志すところが外に向つて進まんとするにあるからである。

九二。荒をも包ね用つて河をも馮り、遐きをも遺れず、朋を亡ふときは、中行に尙ふことを得ん。

卦主たる九二の爻は、陽剛にして下體の中を得るのみならず、六五と相應するが故に、その

度量は、荒穢をも包容するほど廣く、その態度は、大河をも徒渉りするほど果決で、而も、疏遠下賤の人をも遺棄しないばかりでなく、何等の朋黨をもなさずして、極めて公平無私、寛仁果決なる時は、遂には中行の徳ある六五と配合することも出来るであらう。

象に曰く、荒をも包ぬ、中行に尙ふことを得るは、光大なるを以てなり。

九三。平かなるものにして、かたむ 跛かざる無く、往くものに復らざるは無し。艱貞なれば咎無し。其の孚を恤ふること勿れ。食に于て福有り。

この爻は、剛陽の極にあるものなれば、平かなるもので、偏かぬものはないやうに、又、往くものに復らないものがないやうに、すべて、物事は循環するものなれば、天下泰平なればとて、それに乗じて自己省察を怠れば、危険を免れぬ。ただし、この際、艱難を忘れず、よく貞正なれば、咎なきを得るであらう。かくて、おのれは、ただただ誠信ならんことに努力して、人から信任せられないことに就いては、夢にも心配してはいけない。かくしてはじめて永く祿を食んで、幸福を得るものである。

象に曰く、往くものに復らざるは無しとは、天地の際さいなればなり。

上昇したる坤の氣も、一度は下降して元に復るべく、下降したる乾の氣も、一度は上昇して元に復るのは、必然のことだからである。

六四。翩翩へんげんたり。富めりとせずして、其の鄰を以てす。戒めずして以もつに孚あり。

下卦の三陽の賢者が、志を合せて進むのを見ては、おのれもその態度を美として、みづから富めりとするの心を退けて、もつばら謙虚の態度に出でて、その鄰の六五や上六とともに翩翩として飛び下るものである。かくの如くなれば、他よりの戒めを待つまでもなく、すでに誠實の心を以て切望するものである。

象に曰く、翩翩として富めりとせずは、皆實を失へばなり。戒めずして以もつに孚あるは、中心より願へばなり。

この爻ばかりではなく、六五も、上六も、みなともに陰虚にして、實を失つてゐるからである。

六五。帝乙ていいつ妹を歸かへがしめしがごとし。以もつて社さいはひありて元いに吉なり。

六五の爻が、陰柔を以て君位に居つて、下體の九二なる賢臣と相應するのは、あだかも、殷王の帝乙が、その妹を下臣に嫁がしむめたやうなものである。かくありてこそ、福祉を得て

大吉を招くことが出来る。

象に曰く、以て社ありて元いに吉なるは、中以て願ひを行へばなり。

六五は、上體の中で、中の徳を身にそなへて、下體九五の剛中に順ひたいと思つて、それを實行するからである。

上六。城、隍に復るがごとし。師を用ゐること勿れ。邑より告命するのみ。貞しけれども吝なり。

泰平の極まるところは、また亂に復るべき運命にある。それは、ちやうど、城が堀に覆るやうなものである。かくの如く、上下の疏通を缺く場合に在りては、軍師を興すことなく、自己の邑より政令を發するにとどむべきである。真正なる事情にあつても、羞吝を蒙るものであることを忘れてはならぬ。

象に曰く、城隍に復るがごとしとは、其の命亂るればなり。

☰☷ 乾上 坤下 (天地否)

否は之れ人に匪ず。君子の貞に利しからず。大往き、小來る。

前の泰の卦と正反對で、大なる陽は、いやが上にも上昇し、小なる陰は、ますます下降し、天地は隔絶して萬事否塞の象である。かくて、君子の道は消失して、ひとり小人の道のみ増長するが故に、人道少しも行はれない場合なれば、君子の真正にも利しからざるわけである。象に曰く、否は之れ人に匪ず。君子の貞に利しからず。大往き小來るとは、則是、天地交らずして萬物通ぜざるなり。上下交はらずして、天下に邦无きなり。内は陰にして、外は陽なり。内は柔にして、外は剛なり。内は小人にして、外は君子なり。小人の道長じて、君の道消するなり。象に曰く、天地は交らざれば否がる。君子は以て徳を儉にして難を辟け、榮ゆるに祿を以てす可からず。

君子たる者は、自己の徳を内にひそめて、外に現はさないやうにして、危難を免かるべきも

ので、いたづらに祿位を以て顯榮してはいけない。

初六。茅を抜くに茹たるがごとし。其の彙たぐひを以てす。貞しければ吉にして亨。

この初六までは、惡のきさしがないので、真正にしてみづからをよく守れば、吉にして亨るべきである。

象に曰く、茅を抜くがごとし。貞なれば吉とは、志君に在ればなり。

君を愛することを念頭から去らないやうにして、真正以て自守する時は、小人も君子となることが出来よう。

六二。包承す。小人は吉なり。大人は否にして亨る。

この爻は、下體の中で、陰柔を以て陰の位に居り、よく上體の九五を包容順承するものである。この意味に於て、六二が小人の場合は、その順徳かへつて世に容れらるるの幸福ともなるであらうが、もし然らずして、大人なれば、自己を枉げてまでも人に順従することをいさぎよしとしないので、却つて否塞を招くことになる。而して、この場合、大人が否塞を免れないといふことは、いひかへれば、正道が亨通すべきものであることを意味する。

象に曰く、大人は否にして亨るとは、群を亂さざればなり。

君子たるものは、斷じて包承を事とせず、小人の群を亂さないからである。

六三。羞を包む。

下體の上位に居り、陰を以て陽位に在る六三の爻の地位は、顯はなものであつて、恥を忍んでも進まんとするものである。

象に曰く、羞を包むとは、位當らざればなり。

九四。命有れば咎無し。疇たぐひ、社さいはしつに離く。

君命を待つて、はじめて活動するにとどめて、あへて積極的のみづから進んで事をなさうとしさへしなれば、咎もなく疇類即九五、上九ともに福祉を受くることとなる。

象に曰く、命有れば咎無しとは、志行はるるなり。

君命を待つて事をなす時には、世の否塞をも救済することが出来て、その志を實現することが出来る次第である。

九五。否を休む。大人は吉なり。其れ亡びなん。其れ亡びなん。苞桑に繫かれり。

陽剛にして上體の中正を得るこの爻は、世の否塞を休止せしむべき人である。大人なれば吉を得る。然しながら、小成に安んじ、放肆を貧るべきものではなくして、其れ亡びなん、其れ亡びなん、叢生せる桑の木にかかるが如しと、懼れ危ぶむべきである。

象に曰く、大人の吉は、位正しく當ればなり。

上九。否を傾く。先には否がれども、後には喜ぶ。

否の極にある上九は、よく否塞を傾け覆すところの人である。物きはまれば通ずで、従前の否塞も傾覆して、後には安泰となるものである。

象に曰く、否終れば則傾く。何ぞ長かるべけんや。

☲☲ 離下 (天火同人)

同人は野に于いてす。亨る。大川を渉るにも利し。君子の貞しきに利し。

乾即天を上とし、離即火を下とするこの成卦は、色々の意味に於て、同人たるを失はない。而も、同人たることに就いては、公平無私の態度を以て、曠野即極めて廣い範圍を包含するものなれば、往くとして可ならざるはなき有様で、かくては大川を渉るの危険を冒すといへども、差支はない。ただ、この場合、君子の真正なることが、絶対に必要である。

象に曰く、同人は、柔、位を得、中を得て乾に應ずるを同人と曰ふ。同人は、野に于いてす。亨る。大川を渉るにも利しとは、乾の行なり。文明にして以て健、中正にして應ず。君子の正なり。唯君子のみ能く天下の志を通ずることを爲す。

成卦の主たる六二が、陰柔にして陰の位を得るのみならず、内卦の中を得て、外卦の九五に應ずるのは、同人たるの象であるが、大川を渉るの冒險を敢てするのは、六二それみづから爲すところではなくして、乾の行ふところである。而して離は文明の徳をそなへて、而も、

剛健中正の道を以て、六二と相應するのは、これ正しく君子たる者の正道といふべきである。かくて、唯[■]かかる君子のみよく天下民衆の志望を通達せしむることが出来る。

象に曰く、天と火とは、同人なり。君子は、以て族を類とし、物を辨す。

天と火とは、同性である。君子は、それに則つて、同族を集め、異物を辨別すべきである。初九。同人たることを門に于いてす。吝無し。

卦の初爻にあるもので、而も、上にこれと相應すべきものもないので、無私不偏、門外に於て公々然と同人たるを以て、何等の咎もないわけである。

象に曰く、門を出でて、同人たり。又、誰か咎めんや。

六二。同人たること宗に于いてす。吝なり。

六二が同人たらしとする場合ひとり外卦の九五のみを以て己の宗となさんと欲するのは、六二の態度が、あまりに偏狭なるを以て、九五の中心の徳も發揮するによしなく、鄙吝たるを免れない次第である。

象に曰く、同人たること宗に于いてするは、吝道なり。

九三。戎を莽に伏し、其の高陵に升る。三歳まで興らず。

九三は、本来、剛陽にして、而も中を得ないので、あくまでも粗暴の性質を有する。然るに又、六二と同人たらしと欲すれども、中正なるところの六二は、すでに九五と相應じて、おのれに従はざるが故に、天性を發揮して奪はんかと思ひながら、その非理不義なるを知つて、ひそかに兵戎を草莽の間に伏せて、九五即敵の虚に乗じて奪取するに如かずとも考へ、ある時は又、高陵に昇つて敵の形勢を望観しても見たけれども、敵對しがたきを見ては、三年の間兵を興すこと不可能なるを意味する。

象に曰く、戎を莽に伏すとは、敵剛なればなり。

三歳まで興さず。安んぞ行かんや。

九四。其の墉に乗るも攻むること能はず。吉なり。

九四も、九三と同様に、六二と同人たらしことを欲し、僅に墉一重を以て鄰するところの九五を敵として、その墉に乗つて、いよいよ攻撃しようかとも思ふけれども、本来、剛を以て陰位に居る彼は、反省の能力を有するが故に、その不可なるを察して中止するのは、吉を得

る所以である。

象に曰く、其の壙に乗るとは、義克たざればなり。其の吉なるは、則、困しみて則に反ればなり。

九五。同人す。先には號咷すれども、後には笑ふ。大師もて克ちて相遇ふ。

九五は、前述の如く、六二と同人たるべきものであるが、九三、九四のために六二を奪はるるのではないかと、はじめは號泣し喚叫するけれども、結局は、初志を貫いて同人たることを得て歡笑するものである。さりながら、九三、九四もさるもの、よろしく大師を以てうち克つて、はじめて相遇ふことが出来る次第である。

象に曰く、同人たるの先とは、中にして直なるを以てなり。大師もて相遇ふとは、相克つを言ふ。

上九。同人たるに郊に于いてす。悔无し。

成卦の極に居る上九は、相應すべきものもなければ、遂に同人たらんと欲するものを見出し得ないので、九五以下の内争に遠かつて、自己の分に應ずることによつて、悔なきを得るも

のである。

象に曰く、同人たること郊に于いてすとは、志未得ざればなり。

三三 乾下 離上 (火天大有)

大有は元いに亨る。

乾を下とし離を上とするこの卦は、天上に火があつて、萬物を大有し、照明する象である。なほ又、六五の一陰に對して、その他上下の衆陽が依屬する點からしても、大有の義を存するものである。

象に曰く、大有は、柔、尊位を得、大中にして上下之に應ずるを大有と曰ふ。其の徳剛健にして文明、天に應じ、時において行ふ。是を以て元いに亨る。

この卦の主たる六五の爻は、陰柔を以て至尊の君位に居るのは大といふべく、また、外卦の中を得てゐることはこれを中と稱すべきである。かくて、上下の衆陽が、この爻に相應する。尙又、乾は剛健の徳をそなへ、離は文明の徳を有するものであるが、六二は天の九五に應じて萬事時宜を失せずして行ふものであつて、これが元いに亨るといふ所以である。

象に曰く、火天上に在るは、大有なり。君子は、以て惡を遏め、善を揚げて、天

の休命に順ふ。

君子たる者は、大有の卦にのつとつて、善を稱揚し、惡を防遏して、天の美命に順應すべきである。

初九。交はるの害無し。咎に匪ず。艱むときは則咎無し。

初九は、大有のはじめに居るもので、上に應ずべきものもなくて、よく卑下の位に安んじ、敢て盈滿をつつしむものである。元來、富有それ自身は、咎あるものではないけれども、その富有に處しても、常に艱難の時をおもつて、みづから戒慎すれば、咎なきを得るものである。

象に曰く、大有の初九は、交はるの害なきなり。

九二。大車以て載するがごとし。往く攸有りて咎無し。

この爻は、六五の君の信任を得るもので、あだかも、重荷を大きな車に載せて行くやうなもので、あらゆる重任にも勝へ、遠きを致して、何等の危険もない。これ、行くところありて咎なき所以である。

象に曰く、大車以て載すとは、中に積んで敗れざればなり。

中に積む云々とは、九二は剛中にして大任を果し得るをいふのである。

九三。公用て天子に亨せらる。小人は、克くせず。

下體の上位にある九三は、諸侯にあたる。而して、剛且正を以て、よく卑下するが故に、上體六五の君の信任を辱うすることが出来る。この場合、徳少き小人なれば、かならずやその任にたへずして、災その身に及ぶものである。

象に曰く、公用て天子に亨せらる。小人には害あるなり。

九四。其の彭なるに匪ざれば咎無し。

九四の爻は、剛を以て、ややもれば柔にして中なる六五の君に逼り、それを凌がんとするものであるが、それ自身、離の卦に居ることを自覺して、明智を以て事物の道理を照し、その彭盛の態度を抑止すれば、咎なきを得るであらう。

象に曰く、其の彭なるに匪ざるときは、咎無しとは、明辨にして哲らかなればなり。

六五。厥の孚交如たり。威如たり。吉なり。

陰柔にして上體の中に居り、而も五の尊位に居るが故に、その賢徳は、つひに、上下歸嚮の中心となり、衆陽何れも皆誠信を以て交はりをもとめて来る。さりながら、六五は、また、ただ單に順柔の徳を以てする時に於ては、衆剛のために凌駕せられないとも限らないので、威嚴をもつて相接することも必要である。かくて、恩威ならび行はれて、吉を得るものである。

象に曰く、厥の孚交如たりとは、信以て志を發するなり。威如たり。吉とは、易りて備へ无ければなり。

誠信を以て民の志を發せしむるとともに、威嚴がなければ、人民に輕侮の心を生ぜしめて、何等の戒備をもなさないやうにしてしまふからである。

上九。天より之を祐く。吉にして利しからざるは無し。

六五は尊位に居りて、誠信と柔順との徳を身にそなへ、而も、上九なる賢を尊信することは、以て天祐を得る所以である。

象に曰く、大有の上吉は、天自ら祐くるなり。

六五が上吉即大吉を得るのは、天祐を受けるからである。

☷☶ 艮上 (地山謙)

謙は亨る。君子は終有り。

坤の下に艮があるのは、高き山であるのかかはらず、よく地の下に謙退するの象である。萬事よく亨通するも、當然のことである。かくの如く、君子は、謙讓の徳を以てするが故に有終の美を成すものである。

象に曰く、謙は亨る。天道は下濟して光明なり。地道は卑くして上行す。天道は盈を虧き、謙に益し、地道は、盈を變じて謙に流き、鬼神は、盈に害して、謙に福し、人道は、盈を惡んで謙を好む。謙は、尊くして光り、卑きも踰ゆ可からず。君子の終なり。

陽氣下降して萬事を生成化育せしむるところの天道は、ことに光明なるものであり、地の氣は卑きに居り、次第に上昇して天の氣と交つて、萬事を生ずるものである。而して、その天道なるものは、盈滿なものはこれを虧き、卑謙なるものにはこれを補益するものであり、地

道も亦、變轉きはまりなきもので、陵は谷に、谷は陵となるが如く、盈をば謙にまで流布せしむるものであり、鬼神も亦、盈滿には災害を與へ、謙退には幸福を與へ、更に又、盈を惡み、謙を好むのは、人の道である。かくの如く、謙といふことは、尊くして光りかがやくものであり、而もなほ、外より侮を受けることもないのである。君子にして、かかる態度を持つる時は、常に有終の美をなすものである、

象に曰く、地中に山有るは謙なり。君子は、以て、多きを哀し、寡きを益し、物を稱り、施しを平かにす。

初六。謙謙たる君子は、用て大川を渉るも吉なり。

謙の卦の最下位にあつて、而も陰柔なるを以て、謙の又謙なるものである。かくの如き君子は、大川を渉るの冒險もあへて不可なきものである。

象に曰く、謙謙たる君子とは、卑にして以て自ら牧ふものなり。

よく謙遜して、みづから徳性の涵養に努力する君子を意味する。

六二。鳴謙す。貞なれば吉なり。

陰柔中正なるこの爻は、その餘徳おのづからにして音聲や顔色などにあらはるるものであるけれども、ただ、この際、貞正を守ることによつて吉を得る。

象に曰く、鳴謙す、貞吉。とは、中心より得たるなり。

至誠の致すところは、中心より自得せるものであつて、虚飾的のものではない。

九三。勞謙する君子は、終有りて、吉なり。

陽剛を以て下體に在る點よりすれば、謙であり、下體の上位にありて、陽を以て陽位に在る點よりすれば、地位を得て衆陰をなづくるものである。かくして、上の信任と下の歸嚮とを得て、つひに赫々たる功勞をあらはすものである。而もよく謙遜であるところの君子は、申すまでもなく、有終の美を完うするものである。

象に曰く、勞謙する君子とは、萬民の服するものなり。

六四。謙を擡くに利しからざるは无し。

上には六五の君をいただき、下には勞謙なる九三の賢者をひかへてゐるこの爻は、常に謙徳を涵養發揮することに努力すれば不可はない。

象に曰く、謙を擡くに利しからざるは無しとは、則に違はざるなり。
六五。富めりとせずして、其の鄰を以てすれば、用て侵伐するにも利し。利しか
らざるは無し。

至尊の君位に居りながら、よく謙徳を身にそなへ、みづから富めりとはせずして、その鄰な
る六四や上六その他の衆陰とともに、九三に一任して、あへて疑はなければ、よしや服従し
ない者があつて、それを侵伐したところで、不可はない。萬事につけてよろしからざるなき
境遇である。

象に曰く、用て侵伐するにも利しとは、服せざるものを征するなり。

上六。鳥謙す。用て師を行かしめ邑國を征するに利し。

同じく鳴謙といつても、六二の場合とはちがつて、柔を以て謙の極に居るが故に、折角の謙
徳も、それを發揮し得ずして、かへつて聲や色に出づるものである。而も、極まれる地位に
在るを以て、軍師を行ふにしたところで、自己の邑國を征するにとどむるものである。

象に曰く、鳴謙すとは、志未得いまだざるなり。用て師を行かしめ、邑國のみを征す可

きものなり。

三三三 坤下 震上 (雷地豫)

122

豫は侯を建て、師を行るに利し。

坤下震上のこの卦は、坤の地上に、震の雷が出で鳴のは、陽氣が地中より發つて、萬物ひとしく悦豫する象である。尙又、坤は順で、震は動なれば、動いて和順なる象でもある。かかる状態に在るを以て、諸侯を建て、軍師を興す時は、萬民悦服し、士卒從順なるわけである。象に曰く、豫は剛應せられ、志行はれ、順以て動くは豫なり。豫は、順を以て動く。故に、天地も之の如し。而るを況んや、侯を建て、師を行るをや。天地は、順を以て動く。故に、日月過らず、四時忒はす。聖人順を以て動けば、則、刑罰清くして民服す。豫の時なるの義、大いなる哉。

九四の獨陽は、衆陰の應するところであり、従つて、その願望は、常に行はるるものである。而して、坤の順を以て、震即動くは、悦豫たる所以である。故に、天地もかくの如く、理にしたがうて動くものであり、侯を建て、師を興すことも、何等の不合理ともならぬ。天地は

順を以て動けばこそ、日月の運行にもあやまりなく、四時の推移にも何等の間違もないわけである。又、聖人は、順を以て動くが故に、刑罰も少くしてすみ、萬民よく心服するわけである。要するに、時宜に叶ふことといふことの意義の、如何に重大なるかを推測すべきであらう。

象に曰く、雷、地に出でて奮ふは、豫なり。先王は、以て樂を作り、徳を崇び、之を上帝に殷薦して、以て祖考を配す。

先王は、この雷鳴の意義に因んで、音樂を作つて、祖先の功德を褒崇し、この樂を奏して、盛に上帝を祭り、祖先と亡父との遺靈を合せ祭るものである。

初六。鳴豫す。凶なり。

陰柔にして中正を得ないところの初六は、九四と相應じて、その厚遇を得たるために、喜びあふれて聲音にまで發するやうでは、凶たるを免れないわけである。

象に曰く、初六の鳴豫するは、志窮まりて凶なり。

六二。石よりも介にして、日を終へず。貞にして吉なり。

123

中正にして應爻なき六二の爻は、みづから守ること石よりも堅いので、逸豫に耽溺せしめられてはと注意して、日を終ふるを待たずして去らんとするものなれば、貞吉と稱せらるる次第である

象に曰く、日を終へず、貞にして吉なるは、中正なるを以てなり。

六三。盱豫して悔あり。遅ければ悔有り。

陰を以て陽の位に居るこの爻は、不中不正といはなければならぬ。而も、豫卦の主たる九四に對して、上目づかひをして、その意を得たいと希ふけれども、應爻でないので、つひに、九四の容るるころとはならぬによつて、大いに悔ゆるわけである。否、この際、遲疑すれば遲疑するほど悔悟の種となるものである。

象に曰く、盱豫して悔有るは、位當らざればなり。

九四。由豫すれば、大いに得ること有り。疑ふこと勿れ。朋盍簪まるべし。

この成卦が豫しむのは、この九四の一爻に由つてであるからして、かならずともに至誠の限り盡して、あへて疑ひ懼れてはならない。かくて、同志の朋相集まり來つて援助するであらう。

らう。

象に曰く、由豫すれば、大いに得ること有るべしとは、志大に行はるればなり。

六五。貞疾あるがごとくなれば、恒に死せず。

陰柔を以て尊位にゐるところの六五は、逸豫に耽溺しやすきものである。故に、中を得ることを幸として、あだかも身に痼疾が如く、常に戦々競々として戒慎することによつて、死を免るるであらう。

象に曰く、六五の貞疾は、剛に乗ずればなり。恒に死せざるは、中未亡びざればなり。

上六。冥豫す。成れども渝ること有れば、咎無し。

柔陰を以て極をけがすは、逸豫に沈冥するの象である。故に、事すでに成る場合といへどもみづから悔い改めて、態度を變更することに努力すれば、咎なきを得るであらう。

象に曰く、冥豫して上に在り。何ぞ長かるべけんや。

身の破滅が逼り來る有様なれば、最善をつくして態度の改變にむかつて猛進すべきである。

三三 兌上 (澤雷隨)

隨は元いに亨る。貞しきにのみ利し。咎無し。

内卦は、震で、動を表はし、外卦は、兌で、悦を現はすものであるが、その動と悦とは、交互に相依屬隨従するものである。かくして、萬事よく亨通する次第であるけれども、貞正なる態府を保持することによつてのみ、咎なきを得るであらう。

象に曰く、隨は、剛來りて柔に下り、動いて説ぶは、隨なり。大いに亨り、貞しければ咎無し。而して、天下は時に隨ふものなり。時に隨ふの義大いなる哉。

震は、剛を以てよく兌即柔に下ることは、これを人事に即して解釋するならば、貴を以て賤に下り、上を以て下に下ることは、動いて悦服を招く所以である。ただ、この場合、貞正なれば咎なきを得て、萬事大いに亨通することとなる。かくの如く、天下の事は、すべて時宜を得ることに隨ふものである。時宜を得ることの意義を、察すべきであらう。

象に曰く、澤中に雷有るは隨なり。君子は、以て、晦に嚮ひて、入りて宴息す。

兌は澤で、震は雷なれば、この卦は、又、澤中に雷あるの象でもある。君子は、それに則つて、昏晦に向はんとする時には、入つて休息するものである。

初九。官は渝ること有り。貞なれば吉なり。門を出でて交はれば、功有り。

上に相應するものを有しないところの初爻は、その態度は、常に、不偏不倚である。ただ、時宜に隨つて動くもので、何等その態度、その活動を、左右すべきところの一定の趣旨があるわけではないので、よく貞正なれば、吉を得ることとなる。故に、門を出でて、あくまで公明正大にして交はる時は、その功を收むるであらう。

象に曰く、官は渝ること有りとは、正に従うて吉なるなり。門を出でて交はるときは、功有りとは、失はざるなり。

臨機應變の態度を以て、吉を得る唯一の手段は、正に従ふことであり、門を出でて云々といふのは、正にして失ふことなく、かならず功を奏することを意味する。

六二。小子に係るときは丈夫を失ふ。

中正なる六二は、九五に相應すべきなのに、萬々一、あやまつて小子即初九と關係を結ぶや

うなことでもあれば、丈夫即九五の正應を失ふことにもなるであらう。

象に曰く、小子に係るとは、兼ね與せざるなり。

初九と九五とに兼與することは出来ぬ。もつばら九五に相應すべきである。

六三。丈夫に係るときは、小子を失ふ。随へば求めて得ること有り。貞しきに居るに利し。

六三は、本来、九四の丈夫と親比するものであるが、それと關係すれば、初九の小子を失ふこととなるけれども、丈夫に随はんと欲すれば、その要求を實現することが出来よう。ただ、この場合、誠むべきことは、六三と九四とは、もともと正應の爻ではないのだからして、くれぐれも貞正に居つて、邪媚をしないやうに注意すべきである。

象に曰く、丈夫に係るとは、志下を捨つるなり。

六三の爻が、その心に下の初九をを舍つることをいふ。

九四。随ひて獲ること有り。貞なれども凶。孚有り、道に在りて以て明かなれば、何の咎かあらん。

九四は、陽剛を以て位人臣を極めてゐる。故に、六三に随はんとして、その協力を得れば、

九五の君にも迫らんとする勢を示してゐるので、貞なれども凶とする所以である。

但、誠意を以てし、道に合せんことに努力し、明哲を以て處する時は、何等の咎もないわけである。

象に曰く、随ひて獲ること有りとは、其の義凶なり。浮有り、道に在りとは、明の功なり。

民心を得て、君の臣を左右せんとするは、義に於て不可であり、誠信にして道に合して咎なきを得るのは、明哲の功といはなければならぬ。

九五。嘉に孚あり。吉なり。

卦主にして、而も中正なるこの爻は、下卦の嘉善なる六二の賢臣と相應するのは、天下の民衆が善に従ふことを楽しむものといふべきであつて、吉たるは申すまでもない。

象に曰く、嘉に孚あり。吉なりとは、位中正なればなり。

上六。之を拘係す。乃従ひて之を維ぐがごとし。王用て西山に亨す。

天下の民心が、歸嚮することは、あだかも、それを拘係し、従つて又、それをつなぎとめるやうである。かくの如く、周の文王が、殷末に在りて、なほ臣節を守つて、おのれの領土内に於ける岐山を亨祭するにとどめたけれども、天下民衆の心は、ひとしく文王に歸してしまつたやうな次第である。

象に曰く、之を拘係すとは、上窮まるなり。

拘係するが如し云々といふのは、隨道の窮極を意味するものである。

巽上 (山風 蠱)

蠱は元いに亨る。大川を渉るに利し。甲に先だつこと三日、甲に後るること三日。

艮は山で、巽は風なれば、この卦は、山下に風吹きまくる時は、皿の中に蟲がはひまはるやうで、物みな壞亂するの象である。さりながら壞亂したところの物は、ふたたび治まるのは必要であるので、蠱(亂の義)は、元いに亨るといふのである。而して又、艱難の世を救済するには、あだかも、大川を渉るの險難を冒すやうに、あへてみづから進んで事に處しなればならぬ。而も、この時に於ては、日のはじめなる甲に先だつこと三日、即、事のおこる三日前にあらかじめ戒告して置き、甲に後るること、即、事を發してから三日後に、更に宣布して、以て撥亂反正の大業を達成すべきものである。

象に曰く、蠱は、剛上りて柔下る。巽にして止まるは、蠱なり。蠱は元いに亨りて、天下治まるなり。大川を渉るに利しとは、往いて事とするあるなり。甲に先だつこと三日、甲に後るること三日とは、終るときは則始め有り。天行なり。

この卦は、艮の剛が上つて止まり、巽の柔が下つて順なることをあらはしてゐる。而して、天下混亂の状態も、然るべき方法手段を以てすれば、萬事亨通して、ふたたび治まるものである。又、この際、大川を渉るの冒險を敢行して云々とあるのは、みづから進んで、事に處するをいひ、更に又、甲に先だつこと三日云々とあるのは、先甲三日、即、辛、壬、癸は、日の終りであるが、その前に豫告をして置いて、日の始めであるところの後甲三日、即、乙、丙、丁の三日後に、更に戒告をなすのであつて、かくの如く、終あれば始あり、亂あれば治あるが如く、天行ばかりでなくて、萬事循環交替するものである。

象に曰く、山下に風あるは、蠱なり。君子は、以て、民を振し、徳を育ふ。

君子は、風をみては民心を振作せしめ、山をみては民衆の性徳を育成せしむることに努力するものである。

初六。父の蠱を幹す。子有れば、考も咎无けん。厲けれども、終には吉なり。

この初六の爻は、陰柔にして、子としてよく父の蠱、即、父の敗死後の善後策を講ずることあだかも枝葉に於ける樹幹の如きものである。かかる賢子を有する時は、亡父も後顧のうれ

ひなきを得るであらう。

象に曰く、父の蠱を幹すとは、意、考を承ぐなり。

亡父の遺志を繼承して、補修完成することに努力することをあらはす。

九二。母の蠱を幹す。貞しくは、す可からず。

剛中を以て六五に應ずることは、子にして母の蠱を幹するの象である。さりながら、この際子として取るべき態度は、もつばら柔順なるべく、嚴正にすぎるはよろしくない。

象に曰く、母の蠱を幹すとは、中道を得べきなり。

もつばら中道を得て、剛に過ぎないやうにすべきをいふのでわる。

九三。父の蠱を幹す。少しく悔有れども大いなる咎は無し。

陽を以て陽の位に居るのみならず、中を得てゐないところの九三は、餘りに剛に過ぎるもので、多少の悔いなきを得ないけれども、この爻は、元來、巽の卦にあるを以て、順の徳を忘るるものでないばかりでなく、陽を以て陽に居ることは、それ自身正を得るものなれば、大過なきを得る次第である。

象に曰く、父の蠱を幹す。終に咎无きなり。

六四。父の蠱を裕ゆたかにす。往くときは吝を見る。

陰を以て陰位に居るところの六四は、みづから進んで爲さんとすれば、かへつてけちがつくものなれば、ひたすら父の蠱を寛裕くわんよにすることに力つとむべきである。

象に曰く、父の蠱を裕にすとは、往くに未得いまだざればなり。

六五。父の蠱を幹す。用て譽あり。

陰柔にして而も中を得るのみならず、尊位に居つて下に剛にして中なる六二を、その應爻とするところの六五は、よく父の蠱を幹して、譽を立て得るものである。

象に曰く、父を幹して用て譽あるは、承つぐに徳を以てすればなり。

上九。王侯に事へず。其の事を高尚にす。

卦の極に在つて、下に應爻を有しないところの上九は、これを社會的地位よりすれば、無位無官の人である。故に、賢人にして時に遇はざるが故に、あへて王侯に事へることもせずして、みづからその事を高尚にするものである。

象に曰く、王侯に事へず。志則る可きなり。

三三 坤上 (地澤臨)

臨は元いに亨る。貞しきに利し。八月に至りて凶有り。

兌下坤上この卦は、地上より澤水に臨むの象である。而して又、兌は悦で、坤は順なれば、悦にして順なる徳を以て臨むが故に、元いに亨りて貞しきに利しといふ所以である。然しながら、陽氣やうやく消えて、陰氣が次第に長ずる八月に至れば凶ある象なれば、隆盛の時に於て、衰退の時を考へて事を未然に防止するを要する。

象に曰く、臨は剛浸くにして長じ、説んで順ひ、剛中にして應あり。大いに亨りて以て正しきは、天の道なり。八月に至りて凶有りとは、消すること久しからざるなり。

この卦は、陽氣が次第に長ずる象で、悦んで順ふわけであるが、九二は陽剛にして、下卦の中を得て、上には六五といふ正應を有するものなれば、大いに亨りて、正しき所以であり、これまた天道の自然でもある。さりながら、陰陽の消長も亦、必然的のものなれば、陽氣の

長成することも、久しきを保し難くして、八月に至れば、凶あるを免れないことをかねて承知して、事に處することが必要である。

象に曰く、澤上に地有るは、臨なり。君子は、以て教思すること窮まり無く、民を容保すること疆り無し。

上卦の地は、下卦の澤に臨むばかりでなくして、萬事を無限に包容收藏するものである。故に、君子も亦、それに則つて、人民に臨んでは、全力を傾注して彼等を教養し、彼等の事を思念し、また無限に包容保安すべきものである。

初九。咸臨す。貞しければ吉なり。

剛にして陽の位に居り、上卦の六四と相應するものであるが、その六四も亦、すでに正位に在るものである。かくて、初九は、六四の知遇に感じて、誠一を以て民に臨む次第である。故に、初九たるものは、この際、あくまでも貞正にして吉を得ることにつとむべきである。象に曰く、咸臨す。貞しければ吉なりとは、志正しきを行はんことを志せばなり。

九二。咸臨す。吉にして利しからざるは無し。

この爻は、剛中の徳を以て、六五の君の知遇に感激して、眞純の心を以て民に臨むが故に、往くとして可ならざるはなき次第である。

象に曰く、咸臨す。吉にして利しからざるは無しとは、未命いまだに順ふのみにあらざればなり。

如何に人君の知遇に感激するとはいへ、事の理非を辨別して、萬事當を得ることに心がくればこそ、吉にして利しからざるはなき所以である。

六三。甘臨す。利しきところ攸無し。既に之を憂ふときは、咎無し。

陰柔不中なるこの爻は、甘言を以て下民を籠落するものなれば、その結果の如何は、すでに推測に餘あるものである。ただし、この場合、甘臨の不可なるを自覺して、みづから憂ひみづから正しうすれば、大過なきを得るであらう。

象に曰く、甘臨とは、位當らざればなり。既に之を憂ふ。咎長からざるなり。

六四。至臨す。咎無し。

柔順の徳を具へ、位を得て正しきこの六四は、すでに臨道の至極を以てするが故に、何等の咎もないわけである。

象に曰く、至臨す。咎なしとは、位當ればなり。

六五。知臨す。大君の宜しきなり。吉なり。

柔中にして尊位に居るところの六五は、おのれの境遇を自覺するは勿論のこと、おのれに對して忠勤を盡すところの九二の賢臣の才徳を察知して、よくそれを信任して、民に臨ましむるが故に、天下よく治まる所以であり、これまた大君の宜しきなりと稱する所以でもある。

象に曰く、大君の宜しきなりとは、中を行ふの謂なり。

上六。敦臨す。吉にして咎無し。

坤の卦の極に居るところのこの爻は、それ自身、すでに、敦厚の徳をそなへてゐる故に、民に臨む時む時においては、まことに吉にして咎なきを得るものである。

象に曰く、敦臨の吉なるは、志、内に在ればなり。

この上六は、下に於ける内卦の初九や九二と相應するの至順の徳をそなへてゐる結果である。

坤下 巽上 (風地觀)

觀は盥くわんてあらひて薦すすめず。孚有りて頤ぎょうじやく若たり。

坤下巽上の觀の卦は、風が地上あまねく吹き通るといふ意味に於ては、觀視するの義があり、又、九五と上九との二陽が、六四以下の四陰に仰觀せらるる義でもある。然るに、これを宗廟の祭祀の場合に就いて考へて見ると、手を洗ひ清めて、まだ供物をそなへない時に於てはあだかも神在するが如く、誠一の心を以て、極めて嚴肅の態度をとるものである。而して上に在るの人も、かくの如き態度を常に持すれば、下民の瞻仰信服すること疑なきものである。象に曰く、大觀上かみに在り。順にして巽なり。中正以て天下に觀しめす。觀は盥くわんひて薦すすめず。孚有りて頤ぎょうじやく若たりとは、下觀て化するなり。天の神しんなる道を觀るに、四時忒たふはず。聖人は神道を以て教を設けて天下服するなり。

陽剛中正にして下民の大いに仰ぎ觀るところの九五は、上の尊位に居て、順巽中正の徳を以て天下にしめすものである。觀は盥くわんひて薦すすめず。有孚有りて頤ぎょうじやく若たりといふのは、天下の人民

が、上の態度を仰ぎ觀て善化するをいふ。而してなほ、神秘なる天道を觀すれば、四時の變化に少しの過誤もないのである。かくて、聖人は、それを手本として、神明を祭るの道を以て、誠信にして嚴肅に教力を施して、天下を心服せしむるものである。

象に曰く、風、地上を行くは觀なり。先王は、以て、方を省み、民を觀て教を設く。

先王が四方の國々を巡り、民の風俗を察して、剴切なる政教を施すことをいふ。

初六。童觀す。小人には咎无けれども、君子には吝なり。

この爻は、大觀たる九五と、最も遠かり、その九五に對する觀察も、淺く且狭くして、童稚たるを免れぬ。この意味に於て、小人なれば兎も角も、いやしくも君子にしてかくの如くなれば、吝と稱せられても止むを得まい。

象に曰く、初六の童觀は、小人の道なり。

六二。闚觀くわんす。女の貞に利し。

九五に應ずるところの六二は、九五を觀ることは觀るけれども、この爻本來の性質として、陰柔にしてきはめて消極的なれば、ただその一端を闚くわんふにすぎぬ。女子なれば兎も角、いや

しくも丈夫のなすべきところではないのである。

象に曰く、闕觀す。女の貞とは、亦醜づべきなり。

六三。我が生を觀て進退す。

下卦の上位に居りて、陰を以て陽に在るところの六三は、常に、わが身の生ずるところ、即、自己の言行業績を觀て、進みもし、退きもすることが出来るものである。

象に曰く、我が生を觀て進退すとは、未道いまだを失はざるなり。

六四。國の光を觀る。用て王に賓たるに利し。

六四は、九五の聖君に近きを以て、君徳の成果たる國家の光輝を仰ぎ觀ることが出来るのみならず、それ自身、すでに正にして柔順の徳を有するものなれば、聖王に賓禮せられて、王を佐けて徳澤を天下に施すべきである。

象に曰く、國の光を觀るとは、賓たらんことを尙ぶなり。

九五。我が生を觀る。君子なれば咎無し。

陽剛中正にして尊位に居る九五は、活亂興亡その他あらゆる事に對して全責任を有するもの

なれば、自己の行爲を反省して進退すべく、あくまでも君子たるの態度を確乎保持することが肝要である。

象に曰く、我が生を觀るとは、民を觀るなり。

下民の父母たり、師表たる人が、自己省察をすることは、要するに、民の俗を熟察することである。

上九。其の生を觀る。君子なれば咎無し。

無位無官なる上九の人は、直接民の事に當るではないけれども、この卦の最上位に在る點よりしても、下民の仰望の焦點となることに於ては、九五と同様である。故に、交の辭にあるやうでなければならぬわけである。

象に曰く、其の生を觀るとは、志未平いまだかならざるなり。

自己の心志平安ならず、戒慎恐懼すべきである。

三三 離上 (火雷噬嗑)

噬嗑は亨る。獄を用ゐるに利し。

この卦の上九は、上顎に相當し、初九は下顎に相當する。而して、その間に九四といふ物がはさまつたので、上下を齧み合せて、その降害物を除くといふ象である。故に、これを世相に就いて考へれば、姦邪の臣が天下を亂すによつて、刑獄を以てそれを掃蕩すべく、ここにふたたび治にかへることをいふのである。

象に曰く、頤中に物あるを噬嗑といふ。噬嗑して亨る。剛柔分れ動いて明かなり。雷電合して章かなり。柔は中を得て上行す。位に當らずと雖、獄を用ゐるに利しきなり。

剛柔分れ云云といふのは、震の卦、即、剛は、下にあり、離の卦、即、柔は上にあつて、相分れてゐるのであるが、震は動で、離は明なれば、動いて明かなるといふ所以である。而して又、震は雷で、離は電として、この両者が相合する時に於ては、極めて彰明となる。然

るに、六五は陰柔にして外卦の中を得、上昇して五の尊位に居るものであるが、たとひ陰を以て陽の位に居るのは、位に相當してゐないとはいへ、姦邪の臣を一掃するためには、刑獄を用ゐるに何等の不都合もない次第である。

象に曰く、雷電は噬嗑なり。先王は、以て、罰を明かにし法を勅ふ。

震を下とし離を上とするこの卦は、雷鳴と電光とが上下より相合するに則つて、先王は、刑罰を闡明にし、法を修飾して、世の害惡を驅除するものである。

初九。校を履みて、趾を滅す。咎無し。

初九は、庶民に相當するものであるが、小民の事とて、犯せる罪も小さく、従つて、それに對する刑罰も輕くて、木の足械をふましてその趾を入るくらゐにとどめて、それに依つて後の懲らしめとする。かくして咎なきを得る次第である。

象に曰く、校を履みて趾を滅すとは、行かしめざるなり。

足械をつけて歩行を不自由ならしめ、それに依つて後日の懲戒となすのである。

六二。膚を噬みて鼻を滅す。咎無し。

中正なる六二が、刑罰を行ふ時は、その人格に動かされて、あだかも柔かな膚をかんで、鼻までも深く没するほど容易に服罪するのであつて、かくの如き人格者なれば、初九の態度次第では、如何なる嚴刑を課しても差方はない。

象に曰く、膚を噬みて鼻を没すとは、剛に乗ずればなり。

嚴刑を課しても咎なきを得る所以は、初九の剛強に相當するからである。

六三。腊肉を噬みて毒に遇ふ。小しく吝なり。咎無し。

不中不正の六三が、人を刑しようとしても、罪人はその人となりにかへつて反感をいだいて服罪しないのみか、時にはあべこべに反噬を蒙ることすらある。それは、例へば、骨をつけた全のまゝ乾した肉をかんで、毒にかみあてるやうなもので、多少はけちがつくけれども、刑罰そのものは不當ではないのだからして、差支がある道理はない。

象に曰く、毒に遇ふとは、位當らざればなり。

九四。乾肺を噬みて金矢を得たり。艱貞に利し。吉なり。

九四は、陽にして陰に居り。中を得るものでもないので、その刑罰に對する態度は、あまり

に苛酷に過ぎるきらひがあるので、かへつて服罪せしむることが困難で、ちやうど、乾物や骨つきの肉をかむやうである。さりながら、罪人も、遂には、金矢、即、九四の剛直の態度を受け入れて、實を吐くに至るものである。この意味に於て、かかる人物は、あくまでも事を難んじ、貞正を守ることによつて、吉を得べきである。

象に曰く、艱貞に利し。吉なりとは、未光いならざればなり。

この爻が中正を得ずして罪人を感化せしむるだけの人格の力がなくて、そのとるところの道が光大でないからである。

六五。乾肉を噬みて黄金を得たり。貞厲なれば咎無し。

陰柔にして中を得、而も、尊位に居るところの六五は、その人格の力に依つて、服罪せしむることは、さして困難ではないけれども、ただ、ややもすれば、剛陽の氣に乏しいために、服罪せしむるまでには、乾肉をかんで黄金を得るが如き多少の困難を免れないわけである。而して、この六五は、貞正と嚴厲とによつて、咎なきを得るであらう。

象に曰く、貞厲なれば咎無しとは、當を得ればなり。

その爲すところが、正當であるからである。

上九。校を何ひて耳を滅す。凶なり。

初九とともに、本來無位の庶民で、刑を受くべき境遇にあるものであるが、初九の輕刑とはちがつて、罰の極に居るものなれば、首械を荷うて耳を浚するほどの嚴刑に處せられながらも、なほ改めぬ。凶といふべきである。

象に曰く、校を何ひて耳を滅すとは、聰明ならざればなり。

三三 艮上 (山火賁)

賁は亨る。小しく往く攸有るに利し。

艮、即、山を上とし、離、即、火を下とするこの卦は、火が前山を照して草木に光彩を添へる象である。これまた離の意味する世の文彩光明なるものは、一度はかならず亨通するものにはあるけれども、爛熟に至らずして文と質と兩々相俟つべきもので、文それみづからは適度に止めなければならぬ。これ、小しく往くところに利しといふ所以である。

象に曰く、賁は亨る。柔來りて剛を文る。故に亨るなり。剛を分ち、下りて柔を文る。故に、小しく往く攸有るに利し。天の文なり。文明にして以て止まるは、人の文なり。天の文を觀て以て時變を察し、人の文を觀て以て天下を化成す。

この卦は、剛柔交錯して文飾をなす象で、即、柔なる六五が、外卦から來て剛を飾るのは、剛の質を本として、それを柔の文が飾るわけで、ここに文質彬々として亨通するものである。然るに又、剛なる初九が、上つて上九にはひり文にすぎんとするを救済する意味で、これが

小しく往く攸あるに利しといふわけである。かくの如く、陰陽剛柔が交錯するのは、天の文であり、文明をして節度あらしむるのは、人の文である。天の文、即、日月星辰の燦然として輝くのを観ては、四時の變移を察すべく、人の文、即、人倫道德その他諸般のことを観て、天下の民衆を教化達成せしむべきである。

象に曰く、山下に火有るは賁なり。君子は、以て、庶政を明かにし、敢て獄を折さだむること無し。

君子たるものは、離の卦に則つて、庶政の充實發揮につとむべく、又、艮の卦にしたがつて自己の明察を自負して、獄を定むることをおそれつつしむものである。

初九。其の趾しを賁かる。車を舍すてて徒す。

無位の庶民の境遇にある初九は、萬事質素を宗として、その足を飾るにとどめる。故に、いやしくも位あるところの士大夫の乗るべき車をすてて、徒歩に安んずるわけである。

象に曰く、車を舍すてて徒すとは、義として乗らざるなり。

六二。其の須ひげを賁かる。

正應を有せぬ六二は、ただ九三に従うて行動するばかりで、あだかも、鬚ひげが頰ほほについて動くやうである。

象に曰く、其の須ひげを賁かるとは、上かみと與あに興おこるなり。

自己の浮沈をその上なる九三とともにするをいふのである。

九三。賁か如かたり、濡ぬ如かたり。永貞なれば吉なり。

離の卦の六二・六四兩陰の間に介在するところの九三は、文明文飾の極致に居り、従つて、その文彩もきはめて濡澤なるわけである。さりながら、それは、あまりに文飾にすぎるの恐れがあるので、永遠に真正を保持することによつて、吉を得るであらう。

象に曰く、永貞の吉とは、終に之を陵おとしぐこと莫なきなり。

永遠に真正を守るときは、誰にも陵辱おとしされることはない。

六四。賁か如かたり、皤は如かたり。白馬翰かみ如かたり。寇かきに匪ひずして、婚こ媾ごうなり。

離の卦のすぐ外で、艮の卦の始めであるところの六四は、極盛なる文がやうやく素に反らうとする場合であつて、賁、即、文と、白、即、質とに心まどふわけである。この時にあたつて、

たまたま白馬に跨つて飛ぶが如くにして來る人がある。而も、その人は、正應たる初九で、彼に對して寇をするどころか彼に婚媾せんとするものである。

象に曰く、六四は位に當つて疑ふものなり。寇に匪ず。婚媾なりとは、遂に尤とが無きなり。

陰にして陰位に居りながら、心まどうて決しかねてゐるが、この時來たところの人は、寇をなすのでなくて、婚媾なれば、相會して協心努力して、賁の實を發揮して差支はないのである。

六五。丘園に賁かぞる。束帛彘彘たり。吝なれども、終には吉なり。

卦主たり尊位にあるところの六五は、萬事質素を宗として、あだかも農夫の如く耕農蠶桑を以て文飾となし、聘禮用のまきぎぬの如きも、一束ぐらゐにとどめて置くのは、如何にもけちのやうではあるけれども、それは、やがて、庶民をしてその生活を富裕ならしむるとともに、淳風美俗をおこさしめる本となるもので、終には吉を得るわけである。

象に曰く、六五の吉は喜び有るなり。

有終の美を成して喜ぶ次第である。

上九。白賁なり。咎无し。

賁の極は、無飾に歸するもので、萬事華を去り實に復ることに努めなければ、遂には國家の破滅をも招致するに至るであらう。故に、白賁、即、素白無飾を宗とすれば、咎なきを得ることをいましむる所以である。

象に曰く、白賁なり。咎无しとは、上志かみを得るなり。

上、即、上九は、質を以て虚飾の弊を補ふことによつて、大過なからしむることを以てみづから任ずるものであるが、その素志の實現を見るからである。

坤下 艮上 (山地剝)

剝は往く攸有るに利しからず。

この卦は、陰氣が下から増長して、漸次陽氣を剝奪して行く象で、これを人事に就いて考へると、小人が超梁して、君子の勢力を凌駕せんとする有様を示すものである。かかる際に於ける君子のとるべき態度は、坤の卦に固んで、時に順にして、又、艮の卦に則つて、止まつて自己を守ることに努むべきで、積極的に出づることはよろしくない。

象に曰く、剝とは、剝ぐことなり。柔剛に變ずるなり。往く攸有るに利しからずとは、小人長ずればなり。順にして之に止まるは、象を觀るなり。君子は消息盈虚を尙ぶ。天行なり。

群陰次第に陽を剝落して、剛を柔に變ずるの象である。而して、順にして云々といふのは、前述の通り、坤順の卦象を觀て、それに則つてであり、君子は陰陽の消息云々といふのは、天道の運行に準據するものである。

象に曰く、山、地に附くは剝なり。上は以て下を厚うし、宅を安んず。

本來地上に高く聳え立つてゐるべきはすの山が、地に附着してゐるのは、山が崩れて平地となつてゐる象である。而して、人君たるものは、地がいよいよ厚くなるに則つて、下民の利用厚生をはかることに依つて、自己の安泰を來すものである。

初六。牀を剝するに足を以てす。貞を蔑ぼす。凶なり。

人が日夕安居するところの床几などを、その脚部から次第に剝ぎとるやうに、小人が君子を凌駕するのは、貞正を絶滅するもので、凶なる所以である。

象に曰く、牀を剝するに足を以てすとは、以て下を滅ぼすなり。

六二。牀を剝するに辨を以てす。貞を蔑ぼす。凶なり。

脚から辨すなはち床几の身をもたせる板に及んで來るので、いよいよ凶なる所以である。

象に曰く、牀を剝するに辨を以てすとは、未與あらざればなり。

陰柔中正の六二も、上に陽剛なる應爻があれば、剝奪を免れようけれども、それもないので、やられるわけである。

六三。之を剝す。咎無し。

六三は、上九の獨陽と應ずるもので、單獨の行動に出でて剝奪せられようとするところの上九の保全につとむるが故に、剝の時に際しても、なほ咎なきを得る次第である。

象に曰く、之を剝す。咎無しとは、上下を失へばなり。

咎なきを得る所以は、上下の四陰とはなれて、單獨に上九と相應するからである。

六四。牀を剝するに膚を以てす。凶なり。

脚より辨に及び、つひに床几にかけてある人の皮膚に達する次第で、過害のはなはだしきをしふ。

象に曰く、牀を剝するに膚を以てすとは、切に災に近きなり。

六五。魚を貫く。宮人を以て寵せんには、利しからざる無し。

初六より六二・六三・六四と牀几倒しに剝奪して来たところの陰は、その増長の極に達して、つひに人君にも及び、あだかもめざしの如き有様を呈するに至る。さりながら、六五は、本來、柔にして中の徳をそなへたる人君なれば、小人姦邪の臣をば、宮女の如く寛容寵遇する

ことによつて、かへつて自己の味方に引入れるやうにすれば、差支はないわけである。

象に曰く、宮人を以て寵すとは、終に尤とがなきなり。

無闇に小人を峻拒し憎悪することなくして、寛仁大度を以て遇するが故に、つひに尤なきを得る次第である。

上九。碩果は食はれず。君子は與を得、小人は廬を剝す。

上九ひとり剝奪を免れて、生命を全うするのは、あだかも梢の上の大きな果物が食はれないで残つてゐるやうなものである。而して、君子の人格は、亂脈の世に於て、ますますその光を發して、つひに下民に推戴せらるることに至る。これが、下の五陰の與を得ることにあたる。もし、この際、小人輩にして、あくまでも暴威を逞しうして、上九をも剝奪しつくさうとするならば、それは、ちやうど、自分の住居の屋根をはがすやうなもので、かへつて災害を蒙ることになるわけである。

象に曰く、君子は與を得とは、民の載する所なり。小人は廬を剝すとは、終に用ゐる可からざるなり。

われ等の生存を完うする所以は、上に人君があるからであるといふことを自覺して推戴する
わけで、屋根をはがしては、終に用ゐることも出来ないからである。

☷☳ 震下 坤上 (地雷復)

復は亨る。出入疾无く、朋來るも咎无し。其の道を反復し、七日にして來復す。
往く攸有るに利し。

剝の卦の上九の一陽が、下方に復つたのが、この卦である。而して、年の十月は純陰の月であるが、十一月になると、所謂一陽來復で、これより盛陽に向はうとする象であつて、萬事亨通する所以である。且又、一陽上に進出するも、一陽下に復入するも、この卦は、本來、震と坤とより成るもので、それ等の本質に従つて、陽剛の氣が下に動いて、順徳を以て上に進出する故に、何等の障害もなく、漸次陽剛の朋類來ることあるとも差支はないのである。かくて陰陽の二氣は、互に消長反復して、一日目に一陰下に萌してより、二日目に二陰、三日目に三陰と、順次純陰となり、遂に七日かかつてふたたび一陽來復するに至り、陽氣の隆盛に向はんとするもので、往くとして可ならざるなき所以である。

象に曰く、復は亨るとは、剛反ればなり。動いて順を以て行く。是を以て出入疾